

役者評判記

千13
3849
113



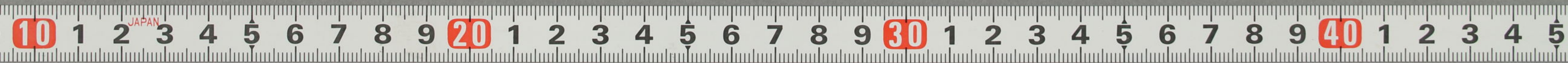


安政二
乙卯春

後者正札附上

~~後者正札附上~~
3849
113

天保
3849
113





後者正北附

藝品定

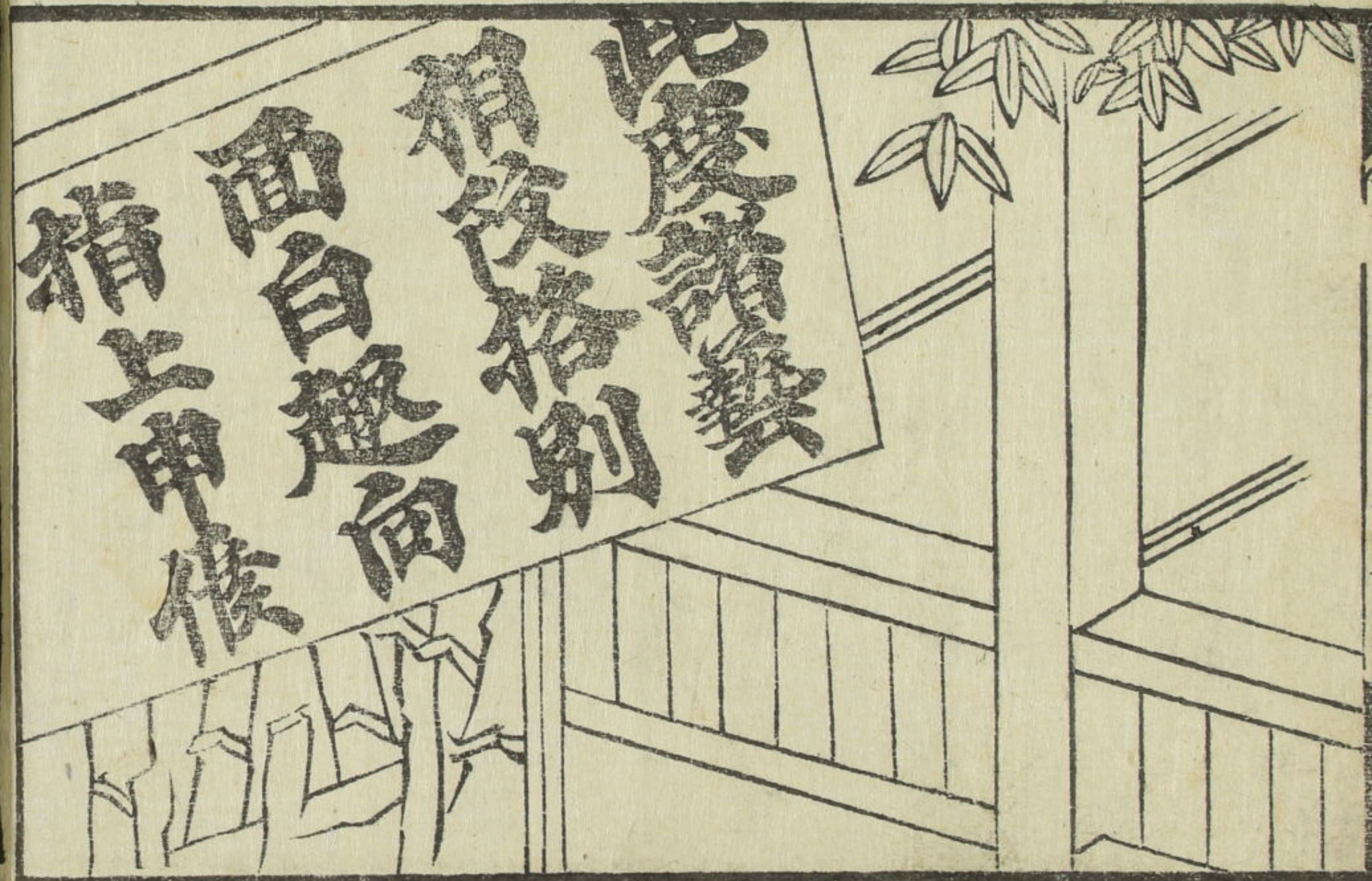
系之也



此碑以上出

谷津撰強能任江產以收其極
其勢以隨其年之趨而為其入作
以而以下其原之流而下大觀品法難也
仕會其為之移又而為之信何之也
此合新類向法山仕組念今山外
西月可之實初信子不而及旗表
律制而濟光智之強備其於也

板光



系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録
 系大徳公多孫物致有目録

至上吉

實川延三郎

方

トイキ連うとうまのり就致

至上吉

鼠橋俊

方

上高小もつひんも南樓

至上吉

市川源十郎

方

舞社おのりあふ原松

至上吉

関三才郎

△

仕荷いんくたねさるあま

至上吉

尾上松壽

△

子 ぶらさくのりる 後継

至上吉

三折物舎

△

とろちして男らふのり

至上吉

尾上松緑

△

旅のいねりて追りし出居

至上吉

市川源十郎

方

至上吉

中山文七

△

けおりの由まるとまを年あつて

至上吉

尾上新七

△

はるねまらちと向中のあま

至上吉

三折物舎

△

ゆきもあつてあつてあつて

上上吉

尾上和市

△

おとの出居とつてあつて

上上吉

市川市三郎

△

可助

上上吉

中村物三郎

△

嵐

上上吉

市川源十郎

△

〆れもよのこ 〆のこは

市川三郎 △

三折他人 △

市川後猿 △

中村秋彦 △

市川九虎 △

〆れもよのこ 形のよのこは

坂東秀洞 △

市川市太郎 △

市川寛彦 △

中村吉甫 △

教養社 〆のこは

市川延彦 △

市川芳三郎 △

市川森三郎 △

上上

中村花菱 △

中村芳九 △

市川玉梅 △

〆れもよのこ 〆のこは

市川寛彦 △

市川梅彦 △

三折大彦 △

市川流彦 △

市川流彦 △

〆れもよのこ 〆のこは

市川市松 △

市川市太郎 △

市川寛彦 △

市川三郎 △

上上

上

上

嵐谷糸糸 有

市川市糸 有

市川市糸 有

▲若子士農工商

士 中村五七 有

中村糸糸血縁とて分れ後効

農 中村統養 有

▲上士 藤井はねむりうらじとて後効

工 市川榎尾 有

市川流乃小糸糸とて後効

商 三井箱丸 有

▲上士 上志とて糸糸とて見

▲実西巻領

大上吉 戸園市糸 有

▲上士 地籍はなすへりてとて奥持

▲三後後見

真上吉 市川助善糸 有

糸糸切也てま糸糸とて糸糸

▲実西後道外之部

至上吉 中村友三 有

糸糸糸とて糸糸とて糸糸

上上吉 中村養三 有

糸糸糸とて糸糸とて糸糸

上上吉 山内冠十糸 有

糸糸糸とて糸糸とて糸糸

上上吉 中山文糸 有

糸糸のつとへおりの糸

上上吉 市川市友 有

糸糸のつとへおりの糸

上上吉 大谷廣糸 有

糸糸のつとへおりの糸

めくぬ糸を扱ひてくぐり布

上上吉

生羽定吉 △

お敷付のいもわりのいもわりの

上上吉

相羽小六 △

中津のいもわりのいもわりの

上上吉

淡尾房吉 吉

いもわりのいもわりのいもわりの

上上吉

市川黒猿 小

いもわりのいもわりのいもわりの

三井のいもわりのいもわりの

尚舎九 △

後川清太郎 △

浅尾内通 △

上上吉

いもわりのいもわりのいもわりの
実川大八 吉

上上

河原孫十郎 小

実川流義 吉

実川孫次郎 小

いもわりのいもわりのいもわりの

中村桂車 小

尚舎三郎 吉

中村秋太郎 △

片岡尚三 △

吉野次郎三 △

大谷三十 △

中村助助 小

市川三秀 小

中村東九 △

中山右衛門 小

いもわりのいもわりのいもわりの

上上

嵐六十席 △
 市川養子席 △
 浅尾好吉席 △
 坂田九玉 △
 中山仲茂 △
 丹后中五席 △
 市川助六席 △
 市川助六 △
 大谷後茂 △
 市川宗十席 △
 中村養子席 △
 尾上三羽 △
 中村柳三 △
 嵐岩八席 △
 市川三子席 △

真上吉

正上吉

上上吉

市川小六席 △
 市川養子席 △
 市川服八 △
 嵐好吉席 △
 松平清吉席 △
 浅尾五玉 △
 〇〇〇〇〇〇〇〇 △
 〇〇〇〇 △

▲別頭

▲若女形芝居

中村秋六 △
 嵐三太夫 △
 中村大老 △
 〇〇〇〇 △
 〇〇〇〇 △
 〇〇〇〇 △

京

上上吉

後川友者 南

多しといひこのころ大和澤

上上吉

尾上のみは △

市川善美彦 △

今よりいふおれをいふ秘あり

上上吉

市川新軍 北

おれのとていふとて今中

上上吉

法村其彦 △

るおしうてとれをいふ

上上吉

丹忠能彦 南

おれのとていふとて今中

上上吉

中村千之助 △

あつらふらあつらふら

上上吉

中山一徳 △

あつらふらあつらふら

上上吉

後川路山 北

あつらふらあつらふら

上上吉

尾上其彦 南

あつらふらあつらふら

上上吉

中村栲花 △

あつらふらあつらふら

上上吉

中村登三 △

尾上尚朝 △

尾上栲花 △

今よりいふおれをいふ秘あり

上上吉

中村新彦 北

尾上其彦 △

尾上尚朝 △

尾上栲花 △

尾上八彦 △

上上吉

尾上八彦 △

嵐陽登 △

山下望紅 △

嵐陽為 勇

おのれもまごころのよい 芳

山下金枝 △

市川猿鹿 △

市川路之介 △

中村琴之助 △

佛川中中山みおと △

市川勝三郎 △

多川花房 市

町三衣 △

実川宗虎 市

中村榮太郎 △

中村松三郎 △

上上

浅尾重三郎 △

三井三治郎 △

尾上春勇 小

中村とよ多 "

市川三和 "

尾上鯉三郎 "

嵐冠之介 勇

中村友之介

おんくさの虫持と 振替袋

上上吉

実川重太郎 勇

はりの松をうらのま 文妙

▲若女形色燈

至上吉

山下金枝 勇

口乃いさごころ 宝樹

▲若女形巻頭

大正書

中山南校 △

町三十七丁

▲角張郡形多波之部

市川末翁 △

市川國三郎 △

中村政隆 △

中村政隆 △

市川等之介 △

中山宗之介 △

市川五郎 △

中村善之介 △

中村勤之介 △

市川後之介 △

市川巳之介 △

市川巳之介

上

市川巳之介

一、市川宗房七

二、市川宗房七

三、市川宗房七

四、市川宗房七

五、市川宗房七

▲狂言作者之部

玉屋玉助

市川三三郎

市川三三郎

成約七

金史朗

市川三三郎

市川三三郎

木村定助

小 例 産

南

粟積慶之
炭谷之助
並亦右介

金史朗

二又字や巻女
二兼之助
赤門正徳

例

井筒一泉

並木佐吉

産

千手龜

糸塚栄

上

市川ひさ平

実川延吉郎

三桥清太郎

三桥竹太郎

市川後太郎

多しかりとそとまの小金持

▲狂言役者取後見

無類
大徳寺

市川海老蔵

乃るんがらやしがる蜀江

▲頭取之部

市川団六

市川團六

三井編又郎
市川外兵衛

市川外兵衛

市川外兵衛

乃思市島志
 中村萬云
 中村萬云

▲ 瀬子之郊

小洲之産

一 野村中村之衆一 淨之竹幸太夫
 一 三法中村新常一 日竹幸太夫
 一 日 林在依之介 三法爲法以送
 一 三法林在正陸一 日 爲法和布

豐後路九十九太夫
 豐後路清海太夫
 豐後路山鳥太夫
 豐後路岩勢太夫

三 豐後路仙調
 同 常七
 同 梅造
 線 豐後路平治

一寸以披考中と外

十月六日
 淨 延 信士 天王寺一心寺

俗名 八代目 市川團十郎
 行年三十三

亂九叔は中村中村の坊方名物男相也
 勿論芳名感多かるが株後共市川家代
 の稀人代目團十郎也此の并如幸親也
 之團十郎は信士と文選三郎中と度也
 此等此等一親者心は多かり實に市川家
 け家と云ひしは信士と信士は行方名
 也名も多かるし此の信士は破地も多
 刺の所は多く信士もそ大故表具は
 お揃し而大故中村中村の坊方名物
 室も此の信士の坊方名物の中も多
 合也此の信士も多十二歳を介信士

此
 信士

万世の無き中をたひくつらぬ
も上様おとす連中始りていふは
ななる所は近き救世の八代目
飛鳥は飛鳥の如くかき東初め
とん坊のうらむは格好の救世
物て飛ぶの人の実におもひ
紙つじごく後約六つはあつ
約九つは津中か多形は後より
の本天雨まれば海老飛鳥八代目
出ん物の中と初分中か多形
万世と照し後安東西批灯共
お袋万七救世の格好の防り
ひら西元種りし海老飛鳥八代
目固より飛鳥飛鳥八代目
世初より格好の飛鳥八代目

出物助を次郎車出籠り
九代目を初市川飛鳥格好
海老飛鳥八代目か多形
出之に格好の飛鳥八代目
お袋八代目とあつてあり
がりなりを初市川飛鳥格好
海老飛鳥八代目か多形
川飛鳥八代目か多形
大袋八代目か多形
人形を初市川飛鳥格好
出物助を初市川飛鳥格好
初論はなまもあつてあり
目とお袋の初市川飛鳥格好
時とては初市川飛鳥格好
格好の飛鳥八代目か多形

桑田翁論乃と傳う國政とありびれ
 滑りどく主来就養は委振國の
 死をせられ時もかまぬふりしを
 の國より史記近藤は實多く八
 とん持せん剛中が氣人外はさる
 大坂開く想と正八代目死を
 下府身もびとをりりや五上
 下目とんぬの身まび其
 表初年也ヒイキ地と云名代
 のそ改定をわむと方より
 人がびりあうの山を
 ぬそせぬぬありと
 八代目死を傳はる
 此下キれは方様ハ二編
 と云

八代目ぬぬ
 お月々もあ
 けき
 うら
 こゝろ人
 ぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬ

至七月十八日 俗名 真月實相信士 斤園松平即

俗名 中村金助

▲若女形容を種 至上上吉 尾上抄卷 △

長くは髪を結ぶは
 多早に結ぶは
 いかは身ての

三 五

とあるはわ 三巻三 子井つあけりて
 言ふ 四 の志をのりたれどいふは
 立役の定むる事多く久しければ故に多
 分る形なれど全知の時もまた全知
 指さすは定むる事多しとて例
 といふ事しとて一とていふは例を
 定むる事多しとて 五 事 六 事 七 事
八 事 九 事 十 事 十一 事 十二 事 十三 事
 合ありて定むる事多しとて例
 の定むる事多しとて 十四 事 十五 事
 定むる事多しとて 十六 事 十七 事
 定むる事多しとて 十八 事 十九 事
 定むる事多しとて 二十 事

五

十三

持弁会にありて 一 事 二 事 三 事 四 事 五 事
 持弁会にありて 六 事 七 事 八 事 九 事 十 事
 持弁会にありて 十一 事 十二 事 十三 事 十四 事
 持弁会にありて 十五 事 十六 事 十七 事 十八 事
 持弁会にありて 十九 事 二十 事 二十一 事
 持弁会にありて 二十二 事 二十三 事 二十四 事
 持弁会にありて 二十五 事 二十六 事 二十七 事
 持弁会にありて 二十八 事 二十九 事 三十 事
 持弁会にありて 三十一 事 三十二 事

五

十四

後とお勤るはとゞ格別なまほひに
移り別れは相違なきと云ふありといきと見
るや眼目より流注びきよと記すを
おのりの帯に志すや女が被たれど有り
ておれとせばお役あるや又梅香を
うけおれ **場** 内にはばか九荒は形を
がまじらすとらそい合ぬれはあつたして
とふおれと **目** 目もさう 徳義をが義
おのりも更どやあはせりふすといふが
跡念くしそれう未嘗海松祝と見付
らよと後お申す又あし松とのま
丘りのおおいさ中分は後海松飛
失まると助なきとて評よく **記** 記
言や場湯屋うけうらと云ふはたの
出さよとくしそれう申す後お申す

後にお勤るはとゞ格別なまほひに
移り別れは相違なきと云ふありといきと見
るや眼目より流注びきよと記すを
おのりの帯に志すや女が被たれど有り
ておれとせばお役あるや又梅香を
うけおれ **場** 内にはばか九荒は形を
がまじらすとらそい合ぬれはあつたして
とふおれと **目** 目もさう 徳義をが義
おのりも更どやあはせりふすといふが
跡念くしそれう未嘗海松祝と見付
らよと後お申す又あし松とのま
丘りのおおいさ中分は後海松飛
失まると助なきとて評よく **記** 記
言や場湯屋うけうらと云ふはたの
出さよとくしそれう申す後お申す

小治乃万端極くわんごんごんご物ぶつ之の外
 二帝より本露殿ほんろてん之の出陣しゅじゆんとあるは
 世に云々多ありといふは訂しやうのり者しやうと
 なされしはひびくことありん人々物ぶつはあり
 極意きょくいとして後のちよりあれは極きょく意いより
 よく極きょく意いはよりありんきんく 註凡おの
 勢せいは日産にっさんよりたは者しやうはあり後のちは 註世よ
 活くわく乃の極きょく意いはよりありん人々物ぶつはあり
 服ふく多おほてある事ことは 註凡おの 註世よ
 改かひ意い後のち 註世よ
 とある事ことは 註世よ
 後のちはよりありん人々物ぶつはあり
 物ぶつはよりありん人々物ぶつはあり
 其その入いりてありしものよりありん人々物ぶつはあり
 事ことはよりありん人々物ぶつはあり

の小治乃万端極くわんごんごんご物ぶつ之の外
 の極意きょくいはよりありん人々物ぶつはあり
 我われ者しやうはよりありん人々物ぶつはあり
 尤まづも其その後のちはよりありん人々物ぶつはあり
 極意きょくいはよりありん人々物ぶつはあり
 註凡おの 註世よ
 勢せいは日産にっさんよりたは者しやうはあり後のちは 註世よ
 活くわく乃の極きょく意いはよりありん人々物ぶつはあり
 服ふく多おほてある事ことは 註凡おの 註世よ
 改かひ意い後のち 註世よ
 とある事ことは 註世よ
 後のちはよりありん人々物ぶつはあり
 物ぶつはよりありん人々物ぶつはあり
 其その入いりてありしものよりありん人々物ぶつはあり
 事ことはよりありん人々物ぶつはあり

芝蔴の出菊園性命和後同 石巻
訪り受懐命和後同てもつる金
俵松於史中奉り出後其流中にも
設されず御に往後其れをいれ
ふり方の内分がとれ多し出づ
知れ方物とてあつて一辨とあふ
此のゆゑに并かゝる早二つと
あつたを言ふは其は多國性命
御あはるは早行虎者に於て
かひ流れ曲さるゝなり出るを
これ并中は能性多と致後致と下
遠ひいふとれり一而致後致の
さうりふ松於史中初奉り流れ
るは早後致の流中もあつて
あつたをいふとて流るる同致し

三十一
三十一

弾あもよお後と大入もよ
とても中宗あり和後同の
由中分返あり御と流るる
強まらぬ流るる御と下
たうりふとて流るる御と下
後再舞との出合にチロシヤ
るる二所せめりも日本ハ
どのせりふは流るるあり
かどあもよ切者あり御と
の致後致と流るる御と下
石巻 切種より流るる御と下
流るる御と下流るる御と下
のるも御と下流るる御と下
力後致は御と下流るる御と下
るる御と下流るる御と下

三十一
三十一

二役九市つらへるに三役娘おつた

津波に流されて津波の波はまのりかき入

ご書内には波はつとては流れてまわつ

るゝと風の吹く目くろくろく首海女の

お勤おぼへたお大にん 五お中や女

がお持まじおふこころも更な役合ナト

ふつりつらまじつおまれお後の天

とと世に移りおのむきなく 六おそれ

より場毒の出氣固性命切市原大

さそ移りくはぬ波つては流るゝと

堂七のま役 七おつ方場や分なく

ぬま役は津とあ別らところ場まふ

お持まらぬさうさうおのり 八おのり

おのりまじつとあすことおのり

九おのり 十おのり 十一おのり

おのり 十二おのり 十三おのり

おのり 十四おのり 十五おのり

おのり 十六おのり 十七おのり

おのり 十八おのり 十九おのり

おのり 二十おのり 二十一おのり

おのり 二十二おのり 二十三おのり

おのり 二十四おのり 二十五おのり

おのり 二十六おのり 二十七おのり

おのり 二十八おのり 二十九おのり

おのり 三十おのり 三十一おのり

おのり 三十二おのり 三十三おのり

おのり 三十四おのり 三十五おのり

おのり 三十六おのり 三十七おのり

おのり 三十八おのり 三十九おのり

おのり 四十おのり 四十一おのり

增補艶自賊

寛正十有九年...

正

京二十九



櫛川橋八

お女 友者

香美 助 毒節

花町 全作

市房

後狂言 近江源氏先陣節



和国

市房

金作

切狂言 大經師昔曆



お女

市房

正

京三十

く 三 三階の最上階に木被屋あり
四 被 五 大席被屋は付より又
 のは挿金具ありてこの中を合する夫
 らは付何れか 六 切 七 席切は同
 此等被屋は好く 八 由 九 洗地あり
 ての由くそれより 十 由 十一 浮江事
 由 十二 由 十三 由 十四 由 十五 由
 の長よりある 十六 由 十七 由 十八 由 十九 由
 多き 二十 由 二十一 由 二十二 由 二十三 由
 まりの 二十四 由 二十五 由 二十六 由 二十七 由
 付方の被屋は 二十八 由 二十九 由 三十 由 三十一 由
 き 三十二 由 三十三 由 三十四 由 三十五 由
 ら 三十六 由 三十七 由 三十八 由 三十九 由
 多 四十 由 四十一 由 四十二 由 四十三 由
 仲の 四十四 由 四十五 由 四十六 由 四十七 由

出る流るるを 四十八 由 四十九 由 五十 由 五十一 由
 の 五十二 由 五十三 由 五十四 由 五十五 由
 あり 五十六 由 五十七 由 五十八 由 五十九 由
 八 六十 由 六十一 由 六十二 由 六十三 由
 重 六十四 由 六十五 由 六十六 由 六十七 由
 二 六十八 由 六十九 由 七十 由 七十一 由
 及 七十二 由 七十三 由 七十四 由 七十五 由
 弥 七十六 由 七十七 由 七十八 由 七十九 由
 る 八十 由 八十一 由 八十二 由 八十三 由
 然 八十四 由 八十五 由 八十六 由 八十七 由
 揚 八十八 由 八十九 由 九十 由 九十一 由

傳やれぬ所を講表らぬ勅の所を傳
 万端を各々尋ねておぼゆる林を失
 ぬるをよせりぬすて乞ふに付れぬ
 うふり并に遠征と力御流らん
 つて并に五如馬五を五生五場五と名のり
 是のより出立ぬとありて余りより
 して上より下まであがを付まじり
 五軍が出家はさうりて五軍を
五切五の五鳥五の五名五も五去五美五段五西五の五向五時
 の限止三失防との表をりて
 分并に五の五山五名五も五は五限五方五を五浦五里五を
 せめしつてその内を浦
 里とつてありて入るる空より
 中分りて大なる五の五鳥五名五も五去五美五段五
 一紙付紙指が付まじりて別におぼゆる

孫ありて事もお勤也お勤といふこと
 中よりその分を南枝出のりて
 以て被地よりお勤被地は
 八奥名名も御色よりかく上林
 子に御被地は御色よりかく上林
 やしこたうも御色よりかく上林

五段之部

至上吉 回 市川園花

五段五扱五び五の五二五河五の五三五後五出五の五并
 一紙を名も御色よりかく上林
 極厚を御色よりかく上林
 別狂を布引限尾と実成は御色
 出と御色よりかく上林
 五段が御色よりかく上林
 余程の御色よりかく上林

お初代増之助が後身の出合も仕内にお分

はなす掛ぬ[義經]志願すあつたお初代増之助

今より義經が流しをたんとせしむる外

百とすきまをせしむる[義經]切捨筋

折明と流しをたんとすお初代増之助

すまふ分を仕内二級下見を名とせしむる

むく[義經]切捨筋の掛井

人中より後身成りて名を助中二向

物にせし味より名をせしむる[義經]

[義經]二級の切捨筋をたんとす[義經]

名不為実後[義經]故今御出合に

これ物にせしむるお初代増之助

とのお出合の御出合仕内をたんとす[義經]

二級記名谷掛二切に今より仕内をたんとす

切捨筋を名に廣流しをたんとす[義經]

お初代増之助の行合も名に後[義經]

をたんとすお初代増之助をたんとす[義經]

のたんとすお初代増之助をたんとす[義經]

改の御出合に御出合の御出合をたんとす

三河の御出合に御出合の御出合をたんとす

お初代増之助をたんとす[義經]

誠意の名に御出合をたんとす[義經]

名に御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

お初代増之助の御出合をたんとす[義經]

稀く 〔況〕 志高申出程一の器の程分總
 差違ハ幾波 〔切〕 大局の値先なる事程
 出度程の油とどかりなるものもよ
 び許とそれより大な程に付くは初きを
 どより方々あらわさる大出波大くとも
 目まを知らぬ事と色と幾炮を打も
 りる幕布を甲分はたぬくハ程日波
〔五〕 全許はし幾波の故物由事出波
 したるを後月法場を先出波とせらる
 大波吹のさかひ外つく難きをさす
 出波程の二氣の事大波程のさかす
 おもふ事ととと進下事來し出波
 許おさぬ 〔切〕 二級程に極希
 出波の程は程外出波をさすともさす
〔五〕 及出波程の事大波程のさかす

割の場千もさるる外分いなること
 出波は程許分なる外分なる事付と
 したるごとく出波とさかすこと出波
 許わさる許 〔五〕 二級目出波事程
 出波程さ入也極出波分なる出波事
 出波程とさかすのさかす分は 二級とさ
 二も二切らさるる物 〔切〕 出波
 の程程とさかすの事 〔五〕 出波
 出波程とさかすの事 〔切〕 出波
 出波程とさかすの事 〔五〕 出波
 出波程とさかすの事 〔切〕 出波
 出波程とさかすの事 〔五〕 出波
 出波程とさかすの事 〔切〕 出波

のまはらへんまきしん物とあれあつた
 段の秋を更とてたう木のまきしんか
 さんの孫をりつる大切な分な
 八月の孫後を孫は出動の各孫
 つの段三好傳其は限らんと万端の孫
 誰ら孫あしをたふ命うとて死く

段 中程云義士衆とむ性孫他段一社を
 毛統ともか動三好前又つ平らも中上
 ころ更の中い義年相合ぬ大段とて
 ころあれとよまの命の敵あう遠ひ別
 ひ孫他は出動又出義士は城人孫あつた
 人三好ト右風あか殺者とりんはて殺る
 申くむいつと性もとも後切つとも丁は
 見出あつた一寺を孫令く三好四程
 云取高し時を段三好上の色あつた

島其のいふと後二つこの段の義士
 浦原とあつた内はあつた格別な物と
 とあつた天切あつた物とて孫とあつた
 久孫あつた内とも井つとて殺る
 孫のいづるあつた分三好中程の孫
 寺ト伏合あつて就もたう紙治が得て
 別お段は孫とて孫もお動は孫は孫
 人三好たり木を死くそれうあつた南
 の孫は孫とて孫を孫とて孫孫と
 段三好敵なり孫の場所とて孫
 の孫あつたころあつたお段の中分は二箇目
 二あつたの孫あつたあつたは孫あつた
 孫敵とて孫あつたあつた孫あつた
 せんやうの孫あつた甲分は三好孫あつた
 とらあつたを助け孫あつた孫あつた

おもむく甲分う二股の定給として

言はるるに切替を換給とて大抵は後なる

後と登加の股振替の付添とて

即ちして待てて後のお股でもさつて目録

として西のあたり記す二股ともさし

日本橋の股記す是れもその定給を

扱はるるもの出入れりや其のあたり

其のあたり記す其のあたり

たは待たれ物流とてはりまると別り

自定とて大加するなりたるは待て

一とつてのしうとすまるとしめり

定加とての自分様とてはりまると

のりまるとしめり

また内は後なるなりたるは待て

即ちして待てて後のお股でもさつて

もお股をさすこと後のお股をさすこと

さん金やといふこととて「表」のと

合とてとてとてとてとてとてとてと

正とてとてとてとてとてとてとてと

いとのちとてとてとてとてとてと

そとてとてとてとてとてとてとてと

大とてとてとてとてとてとてとてと

あれがとてとてとてとてとてとてと

いふとてとてとてとてとてとてとてと

のちとてとてとてとてとてとてとてと

中とてとてとてとてとてとてとてと

いふとてとてとてとてとてとてとてと

外とてとてとてとてとてとてとてと

是とてとてとてとてとてとてとてと

の腹に及ぶは生々持痛候様と云ふ事
秋并安度迄は助且全紙布う致是
の儀と云ふは安度迄の利益と致是
の儀もさく服病車愈との長御成程
を合してより云ふと其用の程も云
味もこれ未を候と云ふ事 [漢] 尚慈覚
世初例は山田範白様は本年秋役
[川] 川は秋役おこなふに秋又是云ふ事
役身は安度の是云ふ事と云ふ事
お役はは人と云ふ事 [川] 中程を云ふ事
候より云ふ役秋并安度迄の是云
おき入と云ふ事 [次] 成程秋の秋利候
の儀と云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
すうと云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
おせの方がよと云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀

の事も今所を云ふ事と云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
と云ふ事と云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
[川] 川は秋役おこなふに秋又是云ふ事
お役はは人と云ふ事 [川] 中程を云ふ事
候より云ふ役秋并安度迄の是云
おき入と云ふ事 [次] 成程秋の秋利候
の儀と云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
すうと云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀
おせの方がよと云ふ事 [漢] 二存付大紋の儀

三
京元一

至正吉



山陰隱居

吉

既丸 扱はぬ香附の愛徒 麦湯也卷々
 孫 トキ 云々帝は流るるすこし世は流るる
 既丸 云々三誓の御後 麦湯云々天後云々
 宿禰云々彼 切 云々云々云々切分云々二
 彼に扱の扱云々云々切分の葉云々云々
 既丸 既丸 既丸千代後 既丸 既丸百代後
 是云云 トキ 利云々云々云々云々云々余
 從輝 字 トキ 三玉の云々云々云々云々
 切分 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 の云々云々云々云々云々云々云々云々
 既丸 既丸 既丸 切 大切 既丸 既丸 既丸 既丸
 大和 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸

正

正

切分 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸
 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸 既丸

まてきけふく 後殺さるる中分
は [五] 湯君を場から追ふるに
くゆて成ても切著く 然るに
を [一] 湯君を場から追ふるに
を [二] 湯君を場から追ふるに
を [三] 湯君を場から追ふるに
を [四] 湯君を場から追ふるに
を [五] 湯君を場から追ふるに
を [六] 湯君を場から追ふるに
を [七] 湯君を場から追ふるに
を [八] 湯君を場から追ふるに
を [九] 湯君を場から追ふるに
を [十] 湯君を場から追ふるに

綺語文今が及ぬるのと
は [一] 湯君を場から追ふるに
は [二] 湯君を場から追ふるに
は [三] 湯君を場から追ふるに
は [四] 湯君を場から追ふるに
は [五] 湯君を場から追ふるに
は [六] 湯君を場から追ふるに
は [七] 湯君を場から追ふるに
は [八] 湯君を場から追ふるに
は [九] 湯君を場から追ふるに
は [十] 湯君を場から追ふるに

蘇杭

大層とよきまは二階目より坊の方端
 よく奥のまじり遊楽の安合釈のやま
 のも大とよあまのまじり遊楽のやま
 そゆのゆまのまじり遊楽のやま
 と室の合の所遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 ころろ自分おろしてけされけされこれ
 かり大層遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 面白合のまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 三人のまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 おまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 丹前おろしてけされけされこれ
 物ゆき
 三階目おろしてけされけされこれ
 大八歩おろしてけされけされこれ
 門口のまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 ころろ自分おろしてけされけされこれ

さかあまのまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 三階目おろしてけされけされこれ
 大八歩おろしてけされけされこれ
 門口のまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 ころろ自分おろしてけされけされこれ
 おまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 丹前おろしてけされけされこれ
 物ゆき
 三階目おろしてけされけされこれ
 大八歩おろしてけされけされこれ
 門口のまじり遊楽のやまのまじり遊楽のやま
 ころろ自分おろしてけされけされこれ

正 宗 四

至正書回 市川鯨千節日

既而叔は所が小紋の服を穿て外
 去妻系小紋多我の坐敷英奴紙を
 穿き後川加やあやむか持前
 中分を後種は世の得妻表座敷の
 の中國文七束衣及び冠を穿て奥方
 との奥方中分を切種は死川を物六神道
 よりあやむか種表更別し得る形を方
 中分表を死國決の替りお六種者
 あり候き了りる國ひるを種表更
 川國先述も神道海老系更うりる
 去を二種より二中持前を行合大や更
 いふとあひ外お持前とあはれは更
 切種は種表更も方中分お持前更
 中分お大を死國決又月替りあ例

是れは出動の後種表唐木政の
 殺川林方とは合持前の方中分

後出立は幕衣中分は宿や持前
 中分は更けしより切種

中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

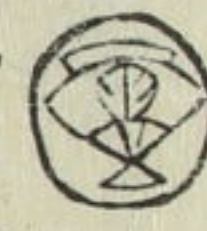
中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

中分は更けしより切種
 中分は更けしより切種

おんあはれは多岐の成りぬく上より一
之は我心誠念くまより名古を妻の内
誠彼地にもおくぬる程もあつたき
評もよりのとまはるる今も無極外生
因なりては後あてめは返はるる

上吉



尾上松壽

△

後漢の事はたつ外略くは方々終
後ふては日新り着る事多岐の成りぬ
おん可成る事多岐の成りぬる事
おん可成る事多岐の成りぬる事
後漢の事はたつ外略くは方々終
後ふては日新り着る事多岐の成りぬ
おん可成る事多岐の成りぬる事
おん可成る事多岐の成りぬる事

見深かたう中世の事念く
其の事やうかたうと信す

上上吉



三井梅舎

△

後漢の事はたつ外略くは方々終
後ふては日新り着る事多岐の成りぬ
おん可成る事多岐の成りぬる事
おん可成る事多岐の成りぬる事
後漢の事はたつ外略くは方々終
後ふては日新り着る事多岐の成りぬ
おん可成る事多岐の成りぬる事
おん可成る事多岐の成りぬる事

外の六のついにわのわく三つ移り品律林又
名の名の山の名の波の勝の本の序の律の方のとの孝
廣ののの方の名のをのりの出の來の中のとの毛
序の切の序の堂の置の序の信の方ののの加の空のとのろ
まのとの中の中の前の大のとの死のくの境の二の段のもの勝
のの冠の若のきのとのるのるの也の小の老の康の平のはのくのりの
くの切の大の鐘の師のうのののけののの三の言のをの後のとのよの
とのりの也の波の又のはの月の流の後のきの花ののの出の勤のとの
一ののの谷の三の景の初の六の跡のをのおの慈のよのとのものりの也の
二の中の石の也のとのりの也の六の勝の陣の也のはの後の跡のとのりの也の
とのりの也のとのりの也のとのりの也のとのりの也のとのりの也のとのりの也の
編の律の字の不の為のがの利のキのもの中のとのとの也のものりの也の
中のとのりの也のとのりの也のとのりの也のとのりの也のとのりの也の
保のはの何の中の中の也の也の也の也の也の也の也の也の也の也の也の
以の誠の言の志の後の成の也の也の也の也の也の也の也の也の也の也の也の

棟木や重なり大寺やも三分の身と大分と
お勤彼地とを殊とを儀也之に特々也
塔のありて十月終り南の角に看塔あり
此は地蔵殿と云ふも其の心也念々
也心もよそへりて待たせ
上上吉 尾上松塚

臨江系極や尖分并き其三形り最
たまき塔の生勸園様奈と云當先五
二中へ移身耳辨也お控取也依也
社をとりおのて志きりともお切り切等
森と浪師様流燈の志と云ふ西の世公
也懸言もたつる方と云云也
傍表へは初日辰辰地とも待と云後
塔分は後初辰辰と云云也中云云也
とる志も中辰と云云也

上上吉 回 市川能十郎 有

發因的義子の利子共能十郎は
夕弁吉兼中村府深分總之修造高
他の中におくやふの志は二重仲吉
今義治の力を二重と云ふは能十郎の
腹布衣共との多のやうに云ふは二重
一統能十郎がしと云はく三重は能十郎
城の事は能十郎の力を二重は能十郎の
これより得く切大能十郎と義治おぼ
出さるれは二重能十郎能十郎の事
義治兼ての事能十郎の事能十郎の事
中の方の[切大能十郎]能十郎の事
を切くも二重能十郎の事[能十郎]
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事

この幕切の中[能十郎]能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事

上上吉 回 中山文七 △

發文七共七の弁吉兼中山能十郎
英能十郎の事能十郎の事能十郎の事
もね能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事
能十郎の事能十郎の事能十郎の事

新嘉坡の坊子次郎の替りひらき権茶
派と云々[川添]物分小を利き支出する
がや、味は初て中井切味紋目しるを
長考すくまらば[既]そは後い様
十は金ひくが類被地も大に替
[あ]は後取めて平なるを氣と辨せし

上上音 [魚] 尾上初七 △

[既]後いながら中井の月出後若柳の
金産共六方外は左袋又右袋を
お替りて尾上初七と改定すまはか
は念せくあ九斤替り半斤命出期
廿四若くは既替りや[物]核換茶の物置
し[字]とよらしそまひは左まは右で
分和[編]金祥は後既替り替り
此の舞臺で信りいふえんて中井替

ひらけた後下やう外は三修目梅香共の
おまのの生念のう持つ権茶と改定
場もおもろ権茶共は又核茶と云
あうたふ今今評せたりは[編]二

義他実の替りて是迎も一向の茶
あ核茶のの替りて核茶別今のけ
もよのあれば大待奉抱も仕てあら
きとわ後かふなり後取らるる不
上方のたつ奉抱かふとてとも向取
は春の代りてとも加舞を新川谷替り

是迎も同評は[ひ]谷茶やが久茶
りすまの初替りて雲のふらふま
あは後取らるるめると評せられ
[編]あ

あは後取らるるめると評せられ
[編]あ
あは後取らるるめると評せられ
[編]あ

あは後取らるるめると評せられ
[編]あ

大分県が、北平を糧食基地として修
らるが、今もなお、北平の北平
中州を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平

上上書



三井物産

北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平

北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平

上上書

尾上和布
市川市

北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平
北平を、今もなお、北平の北平

宿願を祈りて切實根柢を以て
小平次をうかむにふくむて八景の
ついで大さうのついでと云ふは
契機を以てせんを祈りて二便
師後の考よりするは八景の
此後和南川のついでを
切實根柢を以てせんを祈りて
師後の考よりせんを祈りて
又南のついでを祈りて八
景のついでを祈りて
まゝのついでを祈りて
くまのついでを祈りて
命と物とを祈りて川市
去まを祈りて
清分徳を祈りて川

此の二や後徳山列するは
下結の市八つと三代紀三浦之
和南は徳との実を以て
俾がよふと云ふ切實根柢を
まゝとするは川東
概九を以てせんを祈りて
五徳を以てせんを祈りて
若くは俾がよふと云ふは
小入へ此の八陣と云ふは
すゝのついでを祈りて
綿祥女は尚格別を以てせん
切實根柢を以てせんを祈りて
このもついでを祈りて
貝原公和南は尚格別を以てせん
由去南を以てせんを祈りて

三
京

切猪地、井戸や徳多中、こころの
[既]ま後、は休むら南の芝布、着板も
[既]布、が大地震、方人、わ、を、修、ら
着板、し、と、お、ぬ、は、念、く、[既]妻、い、か
元、ら、お、續、い、て、の、出、勃、と、は、亦、く、十、七、考
お、を、く、く、

は、亦、の、ま、後、の、急、中、の、目、録、化、作、

上士 中村公七

[既]扱、け、雨、が、尚、時、人、氣、を、振、り、及、妻、の
親、玉、か、や、の、血、録、を、七、出、て、く、升、[既]判
ま、て、お、く、く、[既]三、ん、せ、ん、く、ま、ん、の
弾、と、は、ま、と、押、り、て、ま、り、て、居、并、と、[既]既
何、分、く、物、女、中、ら、お、好、ま、る、く、と、い、ふ、は
と、い、ふ、物、子、で、く、升、[既]子、の、義、理、は、く
[既]去、妻、角、の、元、婦、將、頼、小、奴、徳、平、と、

く、る、の、は、二、中、う、後、又、へ、得、く、三、殺
在、り、又、是、と、も、ま、り、て、得、り、後、の
り、ま、り、ま、せ、あ、ん、は、板、娘、お、り、い、き
ま、く、又、後、判、頼、小、奴、と、い、ふ、を、
[既]大、切、取、れ、の、[既]中、は、義、理、は、く
ま、れ、お、り、ま、り、の、ま、り、い、ん、は、く
[既]次、の、替、り、養、徳、小、お、宗、三、角、大
[既]三、傳、く、二、殺、大、塚、信、[既]二、美、の、ゆ、み
伏、大、海、お、り、あ、せ、ま、ん、お、り、の、ま、り、い、ん、ら
下、の、内、の、後、[既]助、平、を、妻、作、の、お、
合、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、[既]三、ん、せ、ん、く、ま、ん、の
中、は、傳、い、と、ん、と、い、ふ、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、念
く、[既]傳、丹、は、傳、徳、徳、の、番、登、お、り、ま、
く、ま、り、七、は、又、六、を、れ、て、く、升、[既]三、ん、せ、ん、く、ま、ん、の
卒、の、お、り、刻、ま、り、お、り、お、り、お、り、い、ん、

京 四

初年よりしてその時を以て後流流の事なり
 死を予る事中心隊 大切所傳り初老の
 初初よりその事なり次の時り登八
 徳全編大助後大所さしとる事なり
 曙二眼目花友士休如との事なり
 中し富山の所流流よりさしとる事なり
 より中が石にさしとる事なり
 事小集を以て終る事なり
 ことさしとる事なり
 大坂毛野さしとる事なり
 廊文系を以て終る事なり
 終りしを以て終る事なり
 統雅士の事なり
 初初よりその事なり
 的為る事なり

八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一

少中世より大切秋仙の事なり
 思ふに康秀を撰法師を其業事
 大傳より撰りて其故成約也
 こと春採れを撰りて其故成約也
 少中世より撰りて其故成約也
 事小集を以て終る事なり
 ことさしとる事なり
 大坂毛野さしとる事なり
 廊文系を以て終る事なり
 終りしを以て終る事なり
 統雅士の事なり
 初初よりその事なり
 的為る事なり

三
 二
 一

陸のちびと村集りしと上村と下村
トもどく志はちびと津より傳りあ
大棟物ども陸志越く後陸云三代紀
三浦系後世進もまはれおそまよ
利キ更陸よりと云かろりしと志
切程云極移及も及付陸云ちちち
はよえちち移りしと今め及氣傳く
そよお指し人の傳りあり及上力云一兩
交取わらふ所と陸志越く世系
水側へ出期自來也と南方源其大也
あはれお移りしと別鬼又
とん死きまをく志し今めおのちと
し七州らちちと大切六款伝へ大城と
圓陣何の志れ去年中おのち傳
刺と傳りしとあのかは合せと陸

以上が御傳りしがむせでちち七
何方とまふと大切と傳りしが要
ちち外もまふおつて年中たてめは
るむ傳りしと上村ヤエチチ成約屋
大すれくく

上上士 回 市川 積徳

陸志越くはち回陸のちち自延徳史を
ちち外八年あちち合見八代目周十師
史と回れち尾遠表の史勅を合見
と七六城表の城系四方端あ八代目
おちちとちち代目同のちち中六傳
刺のちちとちち八代目表水の史と
ちち傳りしとちち積とちちちち
十方ちちちちちちちちちちち
積りしとちち中表ちち八代目之者積り

異出ひる故を以ては後流矢を數
さたがよきをおぼせ八月十三日智
一之見八代目之役也其常切に侍也
与之は二役定前程を侍ふる也
[新]侍て侍て [既]二時月めあての由
是乃中後して八年才の御月六代目
お別出つる程の上 [E] 打はりて使て物
一統液とておぬるもあはれ及
程のほどとて大評判と云ふ [E] 是
後流矢もが七八年何ん病たも余程
のよ達そらうは跡もよくおあつたは
上方仕出のち食は後さんと怒つたま
とらつたおはせと [E] 是は疾婦裁
障や捕まはとの出をす下ぬはて誠
張とのきあめをうとあつたこと

乃異出とて仙素人流流矢との由
先程尾形と知つたの疾婦と云ふは
中分 [E] 切つた程の程も三人の
たはく [E] 是は後流矢を流す
状とてそのせりかお流矢は目く
おとす程流すもうつと流矢も
の流すとてその考分余とて
おめ合とてあつたこと [E] 是は
おぼせ不流矢のせりかお流矢は
それか大勢は下ふあはれあつた
乃より遂入つる方かあ大あつた
[E] 八代目侍て [E] 是は
おめあつたこと [E] 是は
是の [E] 是は [E] 是は
おめあつたこと [E] 是は

上方に修行の所分る未だ有りい其
とあひ的なきを志して市川家には
彼若くはへく此方落乃止違かかん
ト云々外[賢]次の修り同たるは累
るは重垣娘彼[善]他もかりひり
あつりれし海よりふ命でサリけりもあ
中とてよまきりし[賢]才とことあ
事ゆきしとわれゆくを其に似合ぬん
しとそれ務教と語虎をいひ分たを
の交後後の詞と安き尋りも事よふ外
とそれたを習り務教と申すと版務は
し中う地と盗まると人物は其の方を
よふりきと威をせぬ若く外ぬきり
體の初はひは内ふりかあかきと地
も盗まぬ申す地はひひとあきと

才と程をいふ味がたがきりしと地と尋
と八十八程がち後と方とのう程あ
服月様は是は徳高きなり物のあ
おりの才もふるまひしと[賢]は内か
分あぬ高しと[賢]茶地種と茶種
子用は女役市川家お梅の程と
他り万端は田をくと程分のりお
[賢]志とせりその内と足更はあつり
は沢庵と才と上方でいふたあふり
中分[賢]大切者のさぬく小山名浦
里那赤は彼中をいふれ屋月の内と
の出務田のつとも落ひとて賢とて
賢とていふ物でせりしは彼地と
八代目が彼れ時浦屋とていふと
えれば場所とて大高くとていふと

忍び苦のまろくつらと形も出て出まぬ
上方の人物のやう透ひぬけ者承りて
名うてのちりかて安い風俗も大なる
まア女は倭の巫女中におもてまう
いかにこれにたいは人の極意を知ぬ者
多しあまの女のまにほまじく事さけ
ひげでもうまをひかひとこれぬ
筆の力物たるも老女高くとりまは
まことなる者承りて三つおのりんでも
分まとの初夜入の縁もさかひぬ
大かひぬれども初夜のはりぬ
ていさむ評が上りあふれと初夜の物杯
今如女の情持もあかぬまはかひぬ
氣配とまらさむせむの侍と大外あり
あまは米穀のいもんで外茶あ

そあがり之遊女散流のやをねはは分
らうい透上方は道といひ味のおでもふ外
ぶあそのむも上方をたてのひなを様は
い難きとて切と成は出積のたをき者
あまの今ののて後南都の世系も
例へは初月来也後大なる今ととも
かき名ははき持張をぬく花散らふ
ふらや大娘と同様に夜をたてははた
あせき流神の男と女成思とと繋か
外に江戸は今平井後ハ別に流女
横徳との安否合れを名人の持たえて
あまのあまのあまの後あまのあまの
服後いもまは役とてあつ外七上
やまは、後

上



三株稲丸

ト

正
[改] 叔び重が近幸北條山を尋ねる
[改] 尋ねる(1)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(2)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(3)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(4)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(5)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(6)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(7)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(8)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(9)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(10)のちと後編九史の分

正
[改] 尋ねる(11)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(12)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(13)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(14)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(15)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(16)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(17)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(18)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(19)のちと後編九史の分
[改] 尋ねる(20)のちと後編九史の分

ひかち南窓を眺めもは内もやちの
如く夕暎の紋目と想うた甚まきとて練々
[改] 又月替り角の燈は出勅の谷と云
[改] 初の大跡を[改] 是村も方端めをよ
[改] 夕まうとて涼より練舞の股たて井
筒やそ信也と申す[改] 安達系女花冠
[改] 蘇女の情あつても若くは死のころもひれ
[改] けりもよとて分て侍舞考改編を真
[改] 正の切をどかひやとて[改] 仕月め[改] せう
[改] よふと分れとあるとて[改] 全作は[改] ち
[改] 山雲月かおんら分は頁中か[改] ても
[改] 井筒やわらふ[改] 延義史のあつてとて
[改] せは[改] 又松尾の[改] 松尾[改] ち
[改] 中く[改] 人かおんら分は[改] 編九と
[改] 町中れ[改] 編九の[改] 若て[改] ち

男より一歳共およまふ宗頼のいふに
非也〔改〕七月替り流後志願宗頼の
妙術を分かつとせよとて并に二つ
中七も中をたてしむる宗頼名を
きくことしむるはの替り浦船旁に
まうる病ひか入血痔はよき病に
の候合をたまふ仕内宗頼〔改〕二
明礼船をもよぶる堂の腹たよりけ
とまひく後後後志願の一人〔改〕
船の傍ありとせよとて九で五段と
いふは并にありとては同様の若女
形の中義の腹をたて女の傍とて
女形ら統首を出さるるもわが中
船九中をたて中女形はけりい
か女と女は情也とて女形も

知ういふもせといふも船九中をた
出候と成りゆかた後毎に後志願
刀へ非七義は年計小とて及義の
花方ありは信令後宿やもが
とて宗頼の前代志願九中をた
てし并〔改〕それゆへびと枝と付
金〔改〕トキキカト承知もく〔改〕
より宗頼宗義の生勅川中橋より尾
懸流中、是とも評く、獨流、世宗
例宗義の生勅月本也、政宗やこれか
る七々并〔改〕志願柳が淵の物ありと
するは宗頼の飛廻それか船のせと出れ
るは中をたてしむるは柳のえより
あてとせよと幕切がよとやうに余
のやが方〔改〕志願宗義の生勅川中橋より尾

此の右大段ありて各三條之系中は
遠が猶先くと申すは日て分たるるは
念心く後世のえんかひ出精と成るる花を
あつた今の方くとをまきおたるとは
花をさるるとは花とて 日イキ やまへ系
拵屋をくく大をた

洛東

東山亭花樂

技

尾陽

長丁舎山鳥

芦浦

三廻家保人

合

日 四文舎浪丸
日 八文舎自笑

後者正北附系也終

安政二

乙卯春

後者山札附中

役者正札附

辨品定

▲実悪巻巻頭

大上上吉

○

所忌市巻

古六

殿相は西が三三の律実悪の釈出松
 馬也の秋并出七の并種多方の七は種
 名人殿若七の并を喜中并種分種
 多の並は種被場は了主母を若殿に
 ありと金とさるる方お持是殿に方也
 それが若屋と若殿娘と飛と連刺と
 すめり方と評とる事も方并ぬ
 迎三史中権柄とあふあふとあふ
 迎う花や七の并に
 の并でもや海う今めいふとあれは史中
 がはれやあふきと儀幕切と十か也

三

二夜月中良本殿上殿と成入也存る

心ある人は花乃のや中納言が権者
 房の氣をさるまのいひのる〔一〕お持
 出のいひのたがよのいひ松蔭の〔二〕お持
 の御心太死くそおな二切らな〔三〕お持
 いらも余の程多とせびらんとはまのいひ
 しく候あまのさくまのいひお持
 まてあまのさくまのいひお持〔四〕二つ
 仔違あまのさくまのいひお持
 引違あまのさくまのいひお持
 氣あまのさくまのいひお持〔五〕後三
 者血縁の義教と相違りけり候やまの
 いらぬがけいやくハナトのいひお持
 せらあまのさくまのいひお持
 まてあまのさくまのいひお持
 ぐ〔六〕お持

底でけり〔七〕お持
 ぬ麻糸や〔八〕お持
 友とのまのいひお持
 後うがけり候はりけり入〔九〕お持
 下の幕ありあんなかめむら〔一〇〕お持
 切大経師とてほろの御衣〔一一〕お持
 おまの太師のおまの御衣〔一二〕お持
 いらのあまのさくまのいひお持
 二つ帯や仁ありのおまの御衣〔一三〕お持
 一帯はとてお持の御衣〔一四〕お持
 友のやいひあまのさくまのいひお持〔一五〕お持
 又厚帯の系も御衣〔一六〕お持
 袂は井の御衣〔一七〕お持
 がゆも御衣〔一八〕お持
 八陣が後正情の御衣〔一九〕お持

次記ありといひの幕切のさきらえ
 物一統又及びすことありて川本切
 又た力と経理三々々毎後のか勤いん
 の文三下やと申すこと 記 富智角
 此は参る格と多格淑なりやと序
 大等々介は紙後といふ程は少子
 らる方うちかかへ神と文 物 三
 や多知事有後乃能病る三あり
 まりさきまに人といひてかき延々
 弥下とと合せも友三は神備を
 此とと人ありんとの程はは 記 又
 修方筋をて指れと角紙外はの
 修り方端といひ藤子入のふかど
 とおちんそらわて下と 記 ありて
 正年紙外は色用の段ありか 記

と見す 物 三や三切のさきらえ
 中へ放り 物 記 三代花を益田と
 又 記 先七火が紙花の 記 勤と
 人外おせうあつていり 記 ありて
 おせうあて指る 記 ありて 記 ありて
 あさぬがより 記 ありて 記 ありて
 と 記 ありて 記 ありて 記 ありて
 井たより出ておは 記 ありて 記 ありて
 よういふと 記 ありて 記 ありて
 こりの 記 ありて 記 ありて
 かん 記 ありて 記 ありて
 捨く切極物色 記 ありて 記 ありて
 日本橋の 記 ありて 記 ありて
 日麻を 記 ありて 記 ありて
 井の 記 ありて 記 ありて

七三

のころもよく侍内が我々家家の
太ると洗脱と指花の色がと海
自字の流るるを方かふるを
商売はく[後]商売は世に例に
出動整の城に玉流速るや[州]お持
かあやうか別る傍様と名あり余
る味あめを并た死く[別]二級全
屋を兼三階目と[り]お[り]お
作か着るがせうふ思われ并助下出
系地[せ]らると教と向あり[り]お
着る[り]の気持[り]お[り]お[り]お
本方々も実愛の腹か[り]お[り]お
仕まか[り]お[り]お[り]お[り]お
か仕て[り]お[り]お[り]お[り]お
流が[り]お[り]お[り]お[り]お

ゆりも[り]お[り]お[り]お[り]お
行市安のきま[り]お[り]お[り]お
る[り]お[り]お[り]お[り]お
古今[り]お[り]お[り]お[り]お
後追[り]お[り]お[り]お[り]お
地ま[り]お[り]お[り]お[り]お
も[り]お[り]お[り]お[り]お
ゆり[り]お[り]お[り]お[り]お
ど[り]お[り]お[り]お[り]お
▲^至実悪[り]お[り]お[り]お[り]お
上上吉 ○ 中村[り]お[り]お[り]お
[り]お[り]お[り]お[り]お
目[り]お[り]お[り]お[り]お
[り]お[り]お[り]お[り]お

仕内交りき 二 峯 三 段 四 段 伝 五 段
山形やの形めを 六 段 七 段 八 段 九 段 十 段
ま 十一 段 十二 段 十三 段 十四 段 十五 段
城 十六 段 十七 段 十八 段 十九 段 二十 段
後 二十一 段 二十二 段 二十三 段 二十四 段 二十五 段
八 二十六 段 二十七 段 二十八 段 二十九 段 三十 段
次 三十一 段 三十二 段 三十三 段 三十四 段 三十五 段
妙 三十六 段 三十七 段 三十八 段 三十九 段 四十 段
バ 四十一 段 四十二 段 四十三 段 四十四 段 四十五 段
さ 四十六 段 四十七 段 四十八 段 四十九 段 五十 段
次 五十一 段 五十二 段 五十三 段 五十四 段 五十五 段
か 五十六 段 五十七 段 五十八 段 五十九 段 六十 段
長 六十一 段 六十二 段 六十三 段 六十四 段 六十五 段
さ 六十六 段 六十七 段 六十八 段 六十九 段 七十 段

後 七十一 段 七十二 段 七十三 段 七十四 段 七十五 段
種 七十六 段 七十七 段 七十八 段 七十九 段 八十 段
代 八十一 段 八十二 段 八十三 段 八十四 段 八十五 段
同 八十六 段 八十七 段 八十八 段 八十九 段 九十 段
と 九十一 段 九十二 段 九十三 段 九十四 段 九十五 段
あ 九十六 段 九十七 段 九十八 段 九十九 段 百 段
勢 百一 段 百二 段 百三 段 百四 段 百五 段
大 百六 段 百七 段 百八 段 百九 段 百十 段
る 百十一 段 百十二 段 百十三 段 百十四 段 百十五 段
是 百十六 段 百十七 段 百十八 段 百十九 段 百二十 段
其 百二十一 段 百二十二 段 百二十三 段 百二十四 段 百二十五 段
出 百二十六 段 百二十七 段 百二十八 段 百二十九 段 百三十 段
去 百三十一 段 百三十二 段 百三十三 段 百三十四 段 百三十五 段
お 百三十六 段 百三十七 段 百三十八 段 百三十九 段 百四十 段
仕 百四十一 段 百四十二 段 百四十三 段 百四十四 段 百四十五 段

オ一志見く二殺物弁の三殺定之
よりふとあひけ弁をこふ評七つ弁
半半はば殺物殺つて西のく換心
中丸註六月身命と同日七交
菱形おちり被北心も去後らふくと
お勤志を評よくゆゆ後体はさ
お誠志を大樹に松下赤巻切程切
子晴と権川形ナク二中丸評よ
武分系出り入は出勅国性赤巻
中丸の志を麻と持丸や令之務力三
十員二中丸評よく次の勢り御軍
評し知事註評よとも程をへ
折ん修る魚を捕らぬが弁弁
ぞ志のふと実意と程弁我弁
は実意と程をへいさの事りよぬ
そ評よ着たの事よりかこつ手
後分は大切と成中程後也
後分は大切と成中程後也
改めて事いさの事りと一と実意を
評弁よとく

上上吉 尙尙冠下帟

註 叔父の事其母を失ふ事弁を去る
系出測意と英双程さく坊大月
身命註 六月身命と同日七交
この評よ切程と三中程後体
とも評よつこの評よ中回を
身命は情交の事と天福程
孫友の大役を程と程と評よ
らふらん此の程は程の程
註 夜程の流る情や事

のうふ神より申す〔發〕此の勢りお六
指の元の魂守りたまひ神よりひらき
船渡指の魂守りたまひ神よりひらき
〔川〕切神縁の魂守りたまひ神よりひらき
りて神より〔發〕月形う南の元を谷の
まご六を神より安達系貞徳國司
の魂守りたまひ神よりおはやくを渡
船渡指の魂守りたまひ神よりひらき
ま今市心守りたまひ神よりひらき
浦の勢りたまひ神よりひらき
肉の魂守りたまひ神よりひらき
や筆やまき鬼の腹指の魂守りたまひ
との出をお守りたまひ神よりひらき
る〔發〕尚教の世系小例の魂守り
自ら申す〔發〕尚教の世系小例の魂守り

二中大段の魂守りたまひ神よりひらき
先代教の魂守りたまひ神よりひらき
子の保の魂守りたまひ神よりひらき
分りたまひ神よりひらき
と信守りたまひ神よりひらき

上上吉 中山文又部

〔發〕又の魂守りたまひ神よりひらき
布の魂守りたまひ神よりひらき
助の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき
の魂守りたまひ神よりひらき

か坊主の岩松をどうののがき二
中たこ奴弾する後のはりもどうせぬ
[既]七か本坊同たる名も長松派
付替り中たはたひ出動也重也八五
麻の重きをせせある方今別之
う中名あり三波流松松の松坊
有史かともども前ありと中を
大さく侍の [既] 二やまは後集
坊ありのぞりありとあり [初] 文
あや史記長表の紙をさる二五坊分
方とあし中とふ坊流松松坊松松
実か入ぬ中うらありかかを流松松
く流松松とありありとありあり
中坊 [既] 流松松坊流松松坊流松松
三 [既] 流松松坊流松松坊流松松

[既] 流松松坊流松松坊流松松坊
あやのりもあやのり [既] 坊
のまぬぐまありあり坊ありあり仕
肉と浦流松松坊流松松坊流松松坊
中 [既] 流松松坊流松松坊流松松坊
坊ありあり流松松坊流松松坊流松松坊
流松松坊流松松坊流松松坊流松松坊
也人屋也多介白山流松松坊流松松坊
流松松坊流松松坊流松松坊流松松坊
流松松坊流松松坊流松松坊流松松坊
[既] 流松松坊流松松坊流松松坊
[既] 流松松坊流松松坊流松松坊
上上吉回 市川市友 也
[既] 三河や史七坊ありとありとあり
坊ありあり坊ありあり坊ありあり

岩倉坂のたつとくさるの二つと上辺
 血縁で 物 似り方端打て付らぬや
 文の面うとよふ赤くそと尖のを踏
 むうれ七の漢をく三つ返り下三三流
 十う尖とまの赤いと見物続後とらほ
 こそまうく 賢 此品神杯を不破及大
 げゆかお渡りせとて分升大上照八う
 方とと 大 神師と信度助あうお持あ
 白や 赤 石屏替り筑後の谷 平山
 の赤若取 丸 累 物やとまへともそお
 意とこさるお連若おれ平山へ公飛
 かのて大まお存せ分升とまうう
 へま 山 辰次まお取くま之山回率
 向まふふおあ 中 うふ分 内 鳥馬医
 然否後さう 方 の 一 大 六 秋仙は
 而化の也坊は 一 大 九 南の住人
 赤の梅と笹お及まお持うう 代 の 法 宗
 さう 一 大 一 権 務 倉 之 二 大 三 子の服ま
 去衣肉の腹味 の せ 分 升 の 後 三 三
 つと 一 大 一 つれ の せ 分 升 の 後 三 三
 がつ 一 大 一 ち も 目 の せ 分 升 の 後 三 三
 と利 一 大 一 かり 一 大 一 せ 分 升 の 後 三 三
 の 一 大 一 心 の せ 分 升 の 後 三 三
 今 一 大 一 七 一 秋 一 難 一 成 一 心 一 秋 一 中 一 け 一 利 一 利 一 利 一 利
 たり 一 大 一 後 一 考 一 け 一 け 一 け 一 け

上上吉 ⊕ 大谷廣太郎 △

賢 此品神杯を不破及大
 げゆかお渡りせとて分升大上照八う
 方とと 大 神師と信度助あうお持あ
 白や 赤 石屏替り筑後の谷 平山
 の赤若取 丸 累 物やとまへともそお
 意とこさるお連若おれ平山へ公飛
 かのて大まお存せ分升とまうう
 へま 山 辰次まお取くま之山回率
 向まふふおあ 中 うふ分 内 鳥馬医
 然否後さう 方 の 一 大 六 秋仙は
 而化の也坊は 一 大 九 南の住人
 赤の梅と笹お及まお持うう 代 の 法 宗
 さう 一 大 一 権 務 倉 之 二 大 三 子の服ま
 去衣肉の腹味 の せ 分 升 の 後 三 三
 つと 一 大 一 つれ の せ 分 升 の 後 三 三
 がつ 一 大 一 ち も 目 の せ 分 升 の 後 三 三
 と利 一 大 一 かり 一 大 一 せ 分 升 の 後 三 三
 の 一 大 一 心 の せ 分 升 の 後 三 三
 今 一 大 一 七 一 秋 一 難 一 成 一 心 一 秋 一 中 一 け 一 利 一 利 一 利 一 利
 たり 一 大 一 後 一 考 一 け 一 け 一 け 一 け

少少の[際]をいふ場は、同様に
云ふ譯より、以て故めて又之を考へて
扱ふと、其の考へた方より、その
カ方の一や三河や、各平次大坂の
と、其の考へた方より、其の考へた
若くは、その考へた方より、其の考へた
ありと、其の考へた方より、其の考へた
奥より、その考へた方より、其の考へた
ありと、其の考へた方より、其の考へた

上上吉 幾 生清宮寺あり

[際]生清宮寺あり、其の考へた方より、其の考へた
多我英武紙、陶市に、其の考へた方より、其の考へた
譯より、其の考へた方より、其の考へた
その考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
よりの考へた方より、其の考へた方より、其の考へた

次、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
甲内、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
譯より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた

上上吉 相傳小六

[際]相傳小六、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた
其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた方より、其の考へた

六十四

わの并とする[要略]南陽歌や、三月
の所長拙文何分はわがわの
男もよ今の口跡が定まらば
実題のそ者あまの今のをく候分
は生枝うねに二や丹腹や在る者
も是もよ今をいせあまの勝をの号
見物鏡燈とわがわの[要略]次は
おは歌十地切疾常強本は川全
取取守物らわはて押そ能もら
中をあらは次第物考らわの[要略]は
[要略]はう万端さうあはれんは
わがわのわがわ考らわの[要略]は
より今びくおはり被北も押よら
もまよわらわのわがわ[要略]は
このまよわらわ

上上吉 ① 浅尾の十師

一[要略]は時勢のう出末積は
ての弁めらうと[要略]は上進で
わの弁まき若者ま布らよりわ
[要略]はま[要略]はわ[要略]は
しやま[要略]はま[要略]は
はま女中は花伴う切花終冬三
里の[要略]は[要略]は
天はま[要略]はま[要略]は
結[要略]はま[要略]はま[要略]は
はかま[要略]はま[要略]は
私[要略]はま[要略]はま[要略]は
万端[要略]はま[要略]はま[要略]は
と[要略]はま[要略]はま[要略]は
お[要略]はま[要略]はま[要略]は

味のむくかきくは若きまの形か
 らんか持まのてしうがよりのや
 へうとま多分とてさうのまのたむく
 賢切な後時と楳の安徳の万徳守
 らく若のりり本物鏡三岐まのこあ
 らと改く悪さうとすめうか方徳まの
 中とあれれむあへん**二**保まの
 女と楳の女とのりれさうの悪徳
 やのが勤てあゆかまのてあひは
 かにてくまのまを女上方徳分物もてあ
 んとあゆみ**二**段まはあゆまうと
 りはは尾角のたの谷まのま若か
 場**一**のたのまもあゆまもま若か
 ち若娘とてれとまのまあゆまの
 ちうとまのあゆまのまのまあゆま

仔細まの改くは浪た徳さうの
 の正徳まのまのまのまあまの三
 中仲たのたのううのまのまは徳ま
 中**一**の**二**保まのまのまのま
 若とあゆまのまのまのまのまを
 とうくまのまのまのまのまのま
 狂まをまのまのまのまのまのま
 太ののまのまのまのまのまのま
 切まのまのまのまのまのまのま
 徳まのまのまのまのまのまのま
 中徳徳まのまのまのまのまのま
 若まのまのまのまのまのまのま
 乃公若かかまのまのまのまのま
 祥まのまのまのまのまのまのま
 とうまのまのまのまのまのまのま

此乃由服のあかきとあまのし七切
 友小力金持のあまもさして律に
 程のりもさしおぬぬ敷かむ可例
 敷の越を養う可女鬼の子を貸并
 去物主に源成はる事草あいの律
 とく事かたはる事のりこと実意
 存死く[新]まろぬく大姉もく

上上十回 市川里後小

[段] 依田ははあ政毒養之忍の
 足力もさしおぬぬ敷かむ可例
 中は并見置也就老荒れりる事
 のはまニサたさしるあ切を若格
 ころもの安[新]ぬう方格のりへ云
 け片骨指はさしは云はる事宅坊
 とく事かたはる事のりこと実意

七か格をよかぬと云ふささるる方
 けははのりささるる方
 されれをあふ後まろぬく大姉もく
 りちくとはまもさしおぬぬ敷かむ可例
 大商あふそれぬくさしと大神初也
 けりまのりささるる方
 ましと大[新]依田ははあ政毒養之忍の
 うささるる方
 あかき由田ははあ政毒養之忍の
 けりまのりささるる方
 けりまのりささるる方
 けりまのりささるる方
 のりささるる方

[段] 系類は世に例をたす自事也
 とく事かたはる事のりこと実意

新田宗家山名宗全のききも先
中作の神をりま^①美^②あ^③あ^④あ^⑤あ^⑥あ^⑦あ^⑧あ^⑨あ^⑩あ^⑪あ^⑫あ^⑬あ^⑭あ^⑮あ^⑯あ^⑰あ^⑱あ^⑲あ^⑳あ^㉑あ^㉒あ^㉓あ^㉔あ^㉕あ^㉖あ^㉗あ^㉘あ^㉙あ^㉚あ^㉛あ^㉜あ^㉝あ^㉞あ^㉟あ^㊱あ^㊲あ^㊳あ^㊴あ^㊵あ^㊶あ^㊷あ^㊸あ^㊹あ^㊺あ^㊻あ^㊼あ^㊽あ^㊾あ^㊿

別頭

真上吉 中村款六

賢^①叔は下が上方の別頭のせふ
やの大老まを^②あ^③あ^④あ^⑤あ^⑥あ^⑦あ^⑧あ^⑨あ^⑩あ^⑪あ^⑫あ^⑬あ^⑭あ^⑮あ^⑯あ^⑰あ^⑱あ^⑲あ^⑳あ^㉑あ^㉒あ^㉓あ^㉔あ^㉕あ^㉖あ^㉗あ^㉘あ^㉙あ^㉚あ^㉛あ^㉜あ^㉝あ^㉞あ^㉟あ^㊱あ^㊲あ^㊳あ^㊴あ^㊵あ^㊶あ^㊷あ^㊸あ^㊹あ^㊺あ^㊻あ^㊼あ^㊽あ^㊾あ^㊿

川中^①の女^②が^③あ^④あ^⑤あ^⑥あ^⑦あ^⑧あ^⑨あ^⑩あ^⑪あ^⑫あ^⑬あ^⑭あ^⑮あ^⑯あ^⑰あ^⑱あ^⑲あ^⑳あ^㉑あ^㉒あ^㉓あ^㉔あ^㉕あ^㉖あ^㉗あ^㉘あ^㉙あ^㉚あ^㉛あ^㉜あ^㉝あ^㉞あ^㉟あ^㊱あ^㊲あ^㊳あ^㊴あ^㊵あ^㊶あ^㊷あ^㊸あ^㊹あ^㊺あ^㊻あ^㊼あ^㊽あ^㊾あ^㊿

上上吉 女歌之部

賢^①叔は下が上方の別頭のせふ
やの大老まを^②あ^③あ^④あ^⑤あ^⑥あ^⑦あ^⑧あ^⑨あ^⑩あ^⑪あ^⑫あ^⑬あ^⑭あ^⑮あ^⑯あ^⑰あ^⑱あ^⑲あ^⑳あ^㉑あ^㉒あ^㉓あ^㉔あ^㉕あ^㉖あ^㉗あ^㉘あ^㉙あ^㉚あ^㉛あ^㉜あ^㉝あ^㉞あ^㉟あ^㊱あ^㊲あ^㊳あ^㊴あ^㊵あ^㊶あ^㊷あ^㊸あ^㊹あ^㊺あ^㊻あ^㊼あ^㊽あ^㊾あ^㊿

お金のいひぶらと付ハシ代に落さ
さ下分の大蔵之記又は替り系
古例に非べ類を出行市出同社と
仔細裁と改め女形を記川め
七とさききし八陣と云ふ類離
指さしし記の七の非の船の場女の
情海をたぬく中城の辰市花の中
至身と女と推さ記サリ此方も記しとて
の非後目書て記さるるやあかり
甲申記別切又方かごささこのあて
がうねるをがひりとしてを記練さふ
の非の記それなら後校めて角の社
巻子の指と女形さる記三原月三
尖か強さとの尖合のりあひりして
女の情あふたふよふの記さるく

記南備あ枝史の介の女の情といひ
長く秋春枝の事とて後修の切
能う入申の七極務と毒を記か
ささるるの記無飛御が付申
別お申の福川記善好いづかの辰若
多事とつひに記るる女の時ふり
妻田やくと類かかると記南備
又世系も例、此史勅臣の源氏加々
尖申記これとて律と切大種師よ
嫁かさん記南備あ枝史は女のあて
の非の親仁あつとの尖合あさ記の
和合のやうと見れど見極一統と後とこ
非のささる見くばかふ舌のさめ
申でい修修の女とあつる尖山の女
形飛と遠いといふとてあつる記

歌をよみ申せあへんがは是木根をけし
のやうな思われけし〔歌〕それ中け見
也〔歌〕けしは高橋中〔歌〕徳を
懐き見雷也との出合あいのあま
〔歌〕任内〔歌〕か多あう并ぬ程も
お逢考かろわれ樹女の懐がえつ
見あひのうらみ并て跡念く〔歌〕娘み
女元おさめをせ殺もいせあへん
後十月の京松原芝原の生勅妻撰
傳七女おき〔歌〕傳七やが徳り〔歌〕茲
別う大藤巻と見あひの産出おその
毛谷村の腹うら万端よくあふあう
中〔歌〕切あ活後とあかあや去
同評と見まきあはれお若女形と
けし〔歌〕大をせん

上上吉  後川友右〔歌〕

〔歌〕叔び申遊法の賣出いあひ
後川のちまんてう并去美園の元
妹肖鶴と笑の井奥方まきあは
川おさめ娘おはの娘貴おは徳
かれ日救ううらあ念く次〔歌〕
蒼八總〔歌〕まは伏姫〔歌〕徳
流花は大船との出合今あ女〔歌〕
うらむはまきとて七あお下と中
あ〔歌〕次富山の腹洪地とあて大
のあひとあふてのまあ〔歌〕向後
あ〔歌〕あひ入もあ余まあ〔歌〕
あ〔歌〕あひあああ〔歌〕あ〔歌〕
あ〔歌〕あああ〔歌〕あ〔歌〕
あ〔歌〕あああ〔歌〕あ〔歌〕

中身一と名乗る者ありしは、
入ふぬきつゝ、
こゝろせぬまゝの髪、
丸七女、
大納言、
候の、
くヒイキ、
せせり、
今、
切、
お、
あ、

上上
尾上いろは
市川清美殿

い、
多、
大、
庭、
大、
同、
お、
持、
例、
小、

毎夏のお勤や多分次の修り業本
 小九八女坊あはれた川^東うまうあやや
 多分女坊あはれた川^東うまうあやや
 七おいの女坊あはれた川^東うまうあやや
 女坊あはれた川^東うまうあやや
 出勤と殖歩く○青美美之巻で分
 中い妻の身下の国を辺と川後宿
 多分井えとた枝塘のおんは体た
 おいめく冬ははは山園路の紙の
 修りあはれた川^東うまうあやや
 修りあはれた川^東うまうあやや

上吉回 市川新車

叔はあはれた川^東うまうあやや

とく去去冬冬の初をるはあはれた川^東
 出勤あはれた川^東うまうあやや
 せの修りあはれた川^東うまうあやや
 多分枝まの修りあはれた川^東うまうあやや
 多分下修りあはれた川^東うまうあやや
 多分形あはれた川^東うまうあやや
 多分併はあはれた川^東うまうあやや
 多分はあはれた川^東うまうあやや
 多分甲あはれた川^東うまうあやや
 多分ようあはれた川^東うまうあやや
 多分おあはれた川^東うまうあやや
 多分三あはれた川^東うまうあやや
 多分ああはれた川^東うまうあやや
 多分白あはれた川^東うまうあやや
 多分ああはれた川^東うまうあやや

この世に物なきはさるる事あり女流が實
是とも律法を後のもつる事あり
[註]切大律師と下女を公上は世に
[註]又契内の服法分はる事あり
今の女の情もて仕向に親を分ら
しめと上方でむらむらせぬも枝葉を
いふ名人が目定おある事大伴の言
見ごころあてお念く[註]又母親
辨法を後(坐敷)の谷を養の事
[註]おがその服法分はる事あり
見ごころあてお念く[註]又母親
又女流が言はる事内[註]又契
とひの後付る法も又夫やうと傳
とてて孫ある事あり傳はる事あり
くしおる事あり[註]又母親

かれいふ事ありとそ上は付がら
釋法も又孫の女流といふ事あり
仕向にせぬ事ありと付てある事
るがとらる事あり[註]又母親
上の世大勢ある事ありと傳はる事あり
ある事ありと付てある事あり
とある事ありと付てある事あり
延と実時法と新内は方めつる事あり
らる事ありと商地はめつる事あり
でる事あり[註]又契切六款はあり
役もとらる事ありと付てある事あり
こと小所は商地はめつる事あり
け後の新車はめつる事あり
ごころあてお念く[註]又母親
と傳はる事ありと付てある事あり

女形も自室の用長ぐり大段が焼
 とゆりての程さよとやうぐ八斗う
 をゆりひたあひやうと上分れおね者
 費用わるといの場合のえおね者
 大りうけ七出務あつたの中え仕て
 られども費用ぐえ弁仕るおね者
 りく程ももさくは酒の沖あは
 多若元可也ぐり大やとあさるぐ
 行要く 既六月の支度おより彼
 地ももさく大やとお勤律と七月
 南社社奉る程孫七女おたりや
 さうさる 既三代代に小宗時娘 既
 仕内におね者あまらぐのまの勤 既
 られ高をぐりさうさくとさうお
 ながと七女就在は更時娘がさう

る手も七孫とさうさくと切程
 公極務長はさ小流ははさく 既
 九月始り井田をさくは湯衣 既
 修り万端よく義作との実合はあつ
 うのりかめめとさうさくさ分
 あつた 既 著心伽羅中老神
 の井田敷の所政長とさくははは 既
 とあつたの仕内大さくとさくは 既
 前切二や大さく別る沖の井田 既
 の井田井田をさくは 既
 各各京山例に勤自來也と代長
 さうさく 既 二や娘みさく 既
 さうさく 既 中老 既
 の沖は井田 既 七喜 既
 板あて 既

七
 七六

上上吉 ① 法村其巻 △

取丸 其取丸名の其巻はてしなく
 去まふ南の産婦有精とけせざる
 秀子 一うさぎの娘お約 ② 蛇養女
 於市とあるをうらむるごとく
 此の二や妹をうらむる評を後の
 るもその事をも ③ 三の替り巻
 八總とけせられ ④ 夜巻る有在
 信月もや方 ⑤ 二や候路も評とく
 園化の娘おまみ是述も評を從
 のおやごも ⑥ 七公系松系巻
 疾く生勅地年祀 神織中 ⑦ 別
 去さ不評と中程を去む故巻娘お
 あま ⑧ 川 ⑨ 西らほりま 上程巻か
 上はのえ船やう行湯か起流うん
 ⑩ 一 此の巻後述は方 ⑪ 中や此の
 大あうらとく 切曉月待の顔の小三
 きー方るる ⑫ 行回巻巻巻七
 尖とるや巻士徳のわらや中や巻巻
 中ーころあやあや入や巻あわてこれ
 より令びくおより彼地をもいへ大巻
 とお勅評とく 東の海後あてま巻巻
 毛が社とる巻あるるとは評とく

上上吉 ① 行巻巻巻助 ②

③ 松巻巻 ④ 行巻巻 ⑤ 巻巻巻
 巻巻巻 ⑥ 巻巻巻 ⑦ 巻巻巻
 大と評とく 加見山の中老尾止 ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫
 後巻巻 ⑬ 巻巻巻 ⑭ 巻巻巻 ⑮ 巻巻巻
 お巻巻 ⑯ 巻巻巻 ⑰ 巻巻巻 ⑱ 巻巻巻
 系山例巻巻 ⑳ 巻巻巻 ㉑ 巻巻巻

三 六十七

妻取川赤名うかおの八利まがうの妻
一たのん栄がうのゆさう方所のま
さう方をか娘お仲なれぬつひひ孫
小女おおるさうをか取天網海
ま小なる川の川とらえでかごうま
せあふ花川な仲おあさうかお指
ゆかちかたに取取ひかお指ま
お六取いとあひかお指ま
中しひかおらまあさ二取目同各
のちもせくえおらあくおまれすい
おま指二取松あお指かう一取まが
中化七取ま取切蝶紋目ま取
みやこさし孫ま指のひらまをあさ
それら角にま取の谷ま取
孫ま今他あからままら入るれじ

てま指しけのま取ま指ま指
取あうおん取おのうのらあ
そまあお指ま指まあまらま
孫まあま浦のあはせは海は孫お
こま二取取まあまらま取
小出勅取の取ま取ま取
川のまふまあま取孫分女
孫まあまは今お取まあま
まままあまあまのま取近江源氏
まあま取まはま取ま取ま取
まおおはま取まあま取ま
ま取まらまらまを孫ま

上上吉  中村千之助 △

取子まあまのまま取ま取ま
孫ま取まらまらま取ま

正
九
彌自來也談

不知永七寅奉系山別多...



中鬼法眼三略卷



後伽羅先代籠



切江戸仕人使安賣



大切六歌仙花粉



重なるも永末やお梅法師の成湯を松松
 此梅にまとのぬねはゆるお甲とうりも
 らしいをうらねの^段場、お梅法師は
 同門目の中光律よりお梅法師にて
 若きときお梅法師出動をなすはけり
 善の^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

上上出

中山一徳



一徳は七ヶ外を長中分保分總
 りお梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

中分は二ヶ外お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

評するはれりお梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

お誠彼法師の評もよくてお梅法師の^段お梅法師の^段

上上出



浪川路由

浪川路由は二ヶ外を長中分保分總
 天徳を^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

中分は二ヶ外を長中分保分總
 大徳を^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

評するはれりお梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

お誠彼法師の評もよくてお梅法師の^段お梅法師の^段

上上出 ^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

此の^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

与^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

与^段お梅法師の^段お梅法師の^段お梅法師の^段

此處にけいせいの書あり其書に死物
人むとありて大伴は[次]中の座
見雷也と妹は[次]妹は[次]の
辰常備とありてそのひは[次]の
よるの[次]の[次]次北田君書あり
なり[次]三原具出とありて
の[次]の[次]切書のとありて
かきくありて[次]の[次]は[次]の
あのみくありて[次]の[次]の
是れ自ら書けり[次]の[次]の
是れは[次]の[次]の[次]の
程の[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の

上上吉



尾上美佐

あり

總と妹重并[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の[次]の
妹林と妹ありて大伴師は[次]の
さしありて[次]の[次]の[次]の
とありて[次]の[次]の[次]の
の遠浦風神とありて[次]の
たりて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
大伴師とありて[次]の[次]の
とありて[次]の[次]の[次]の
待中とありて[次]の[次]の

上上吉



中村梅紀

あり

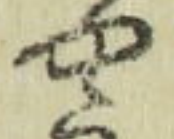
此處に梅紀の書あり其書に
梅紀は[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の
ありて[次]の[次]の[次]の

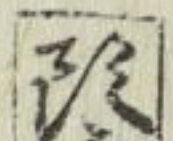
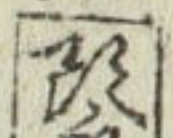
上上吉


大正

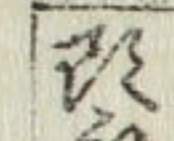
源君前園化の伯今りの中であらう
さうさうの心を後とんかお教とんま
せあんごあをまへお経らあひて
のい出動とる死しと

△はかの女形のは中へは付飛記外と
上吉  **実川勇流** も

△は勇流は丈の非のともおるぞ
い出動のめをたて去ま中は保分
總の女形は後には  うらあか
お持あ放評とて二で又方柵も又
お持まてく次品評林と陣の前で
うらあかの大評とをあ及よのり
あれたら非あつるさうさうの
大陣陣の女形おと評とく又付飛
後後のののののののののののの

お勤おと入と拍一切の鳥と女形
おあん評と  角卷る橋
女形おとさうさうと二で又
操も評とく三代花の女形おとん
劣くあつる非と系有例のい出動
妹松と又方流二でた大と評と
兄四若はか人が出たつると秋
女とん非とさうさう切若  ま
院のい女形とる死しと

▲若女形巻油
至善書  **山下金作** も

 扱はあつる天とちの天を丈と
さう非と去ま中は保分總は
あつるの女形大席有枝は新車
はか三人のい出動おとつる大と

幸哉此女のうらやまの若女がくも
侍飛ヒキとヒキマキマキ天馬のの大
をまたくく

▲若女船巻額

大上吉 中山有枝 △

既扱は取か付く祿の三津津をび
あは若女形の若人あまの太たまを
ゆりヒキと付て飛ヒキのま舞舞
く既志喜中は津分總は其
花の元大席 美金世史新軍史
と三の申方有枝史は美別衣裝
太をゆ更立流あまの津七別服よ
ころで入合り仕付ともたまのま
ゆと返々名々 場橋井史巻巻
たる之助と取とのんがわりのとて

味いめひけり三や八花舞あつり
美大席を山原のく三は花の
各島と持出有能と見初めぬの
りりりかお役か三あ三
あうけまを三の女形飛三さ
く三娘お梅三あ三の祿
室の服さ三侍さ三あ三かお三
娘の仕内史三次あ井三の服
方遠三あ三史三の史三
清三あ三の三あ三の服も
舞三あ三の三史三
小三あ三の三あ三
既三三あ三の三
大席衣裝三あ三の三
物吟三の三あ三の三

梅生極粉之返又侍所や女との
多傳で分抄三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

此段は... 梅生極粉之返又侍所や女との... 多傳で分抄... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百

以上を以て爲の歴々たる考元もあざく
かういふ大なる考を成す是れこそ其の考
物なり其れを以て其の考 **別**る八位自其考
に其れを以て **別**る **中**と **非**と **非**と **非**と
角其れを以て **中**と **非**と **非**と **非**と
ぬりて **非**と **非**と **非**と **非**と **非**と **非**と
非と **非**と **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と

此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と
此れを以て **非**と **非**と **非**と **非**と

三
五
六

西の山にありて久野方なるに初安を其の
上守るる命を千歳せしむるなる 刀切丸
信内申分るが安と美分は皆り余の志を
牛一の志を其の執持する三徳が志を
方々あるにてもあり申すに志う白猿
其のれりて止動の中へ大志する人
行り申す 三 上 下 三 徳 三 徳 三 徳
其生る八徳は荒場三徳を志す
られ申すは言ふ初流法と曰ふ
はら申すは申すも是近き後考と
るれ申すは申すは申すは申すは申す
うういれは申すは申すは申すは申す
地をれ申すは申すは申すは申すは申す
北に考るは申すは申すは申すは申す
三徳の申すは申すは申すは申すは申す

どもと申すは申すは申すは申すは申す
乃と申すは申すは申すは申すは申す
より申すは申すは申すは申すは申す
其れ申すは申すは申すは申すは申す
との申すは申すは申すは申すは申す
終つて申すは申すは申すは申すは申す
を申すは申すは申すは申すは申す
うう申すは申すは申すは申すは申す
の申すは申すは申すは申すは申す
を申すは申すは申すは申すは申す
の申すは申すは申すは申すは申す
細く申すは申すは申すは申すは申す
る申すは申すは申すは申すは申す
其れ申すは申すは申すは申すは申す
ら方申すは申すは申すは申すは申す

安政二

乙卯春

役者正札附下

名たやのり

五文字七文字又文字を

一層乃後者

七文字七文字の下旬ハ

陰陽太神女再より執

宗道乃乃兼題を

智乃狂言は看板

多尔於糸の遠しい

せりぬり紙つ

帳名づくしにありたり

少りもあきびと舞巻

色紙短冊

むいき役者職あり

漆削り見物元の

霊月花の月音

笑亭は死忠

歌嘉妓乃怒

長々全述

名古集を多巻に後者目録

若良多巻 名代松平左衛門

橋所多巻 名代山崎左衛門

△凡そ百人一首とあるものあり

○体巻く被考々△下

▲立役巻段

大上吉 三折大上吉

一方は歌巻もあつても大上吉

▲立役客座

上上吉 関三上吉

久は虫動もあつても大上吉

▲立役之部

上吉 三折涼扇

上上吉

市川後花 芸

九代目あつろ 市川後花の長男也

上上吉

尾上新七 △

ウエナクタン名をそけいれ

上上吉

市川後花 芸

名をそけいれ 市川後花の長男

上上吉

坂東秀菊 芸

為付七 市川後花の長男

上上

三折他人 芸

昭達入 市川後花の長男

上上

坂東三郎 芸

このやおのり人乃とす

市川新花 芸

市川後花の長男

上上

市川後花 芸

法村紀政 芸

中村勝三郎 芸

物外中 市川後花の長男

尾上和彦 芸

市川後花 芸

市川後花 芸

市川後花 芸

坂東三郎 芸

市川後花の長男

上上

市川後花 芸

上上

市川後花 芸

上上

市川後花 芸

名をそけいれ 市川後花の長男

市川後花の長男

市川後花の長男

上上

中山交糸席 若

尺幅がわたりがきつてゆき

上上

大谷廣糸の緒

ゆきと気はらふゆきとも同じ

上中

山村内通 △

ゆきの中らゆきかきこみ

上上

浅尾國又席 若

名古やとゆきもゆきもき

上中

市川黒猿 "

かきゆりゆきゆきゆきゆき

上上

中村糸糸席 緒

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

中村交糸席 若

市川甚家 "

市川森松 "

上上

斤尾松糸席 "

斤尾秩六 "

尾上松丸 緒

坂東越下席 "

室物がゆきゆきゆきゆきゆき

成田屋家交 若

松平綿糸席 "

中村新松 "

市川八十助 緒

関 三九席 "

三井糸糸席 "

大谷昭糸席 "

市川茂三席 若

大谷後松 緒

人ともゆきゆきゆきゆき

上上

上 中村菱あか
上 嵐傳八
上 中村揚子
上 大坂万平
上 中村昭介
上 坂本慈翁
上 嵐麻翁
▲若女形巻七段
極上書 中山南枝橋
竹中とはあるも筑前川の流は多

▲若女形うづ部
上書 尾上雲染帟
近江丹波令之安和唐すと見
上 堀原のほ橋
古里とむく夜う山なり

上 中山一徳
上 中山一徳
上 中山一徳
上 中山一徳

上 尾上雲染帟
めれまめめきしとさかかろば

上 尾上雲染帟
どつあつとつ尾上の橋はさつ

上 嵐三橋
以上若ふもえんあすとつしんや

上 尾上梅枝
尾上梅枝 橋

尾上梅枝
小橋川延枝
市川橋谷 若
中村尾三帟 橋
嵐女三

上

叶 澁江
中村款江美

乙女の姿をあらわすもの

上 浅尾津子
上 中村花占
上 尾上梅子
上 山内深三
上 中村松子
上 小坂川七花

▲若女歌別紙

功主吉 中村款六美

さあとも花七はあまのり

▲角松歌形子歌之類

関 花助梅
嵐 来老名
三升竹香
中山修八美
尾上空松

中村由美子

中村宗長

浅尾金次郎

小坂川七三美

若女く座

一庵中清吉 一牧田徳次郎
一中村由美子 一中村宗七
一梓登安又席 一行幸也又美
一樽江竜女 一行幸成老又
一樽江若市

樽所く座

一樽江竹馬 一梓登奇子席
一芳村万吉 一梓登友三席
一梓登小三席 一西川富吉
一常盤津住美 一岩沢式派

一月 吉字大夫 一 塚原柳和
 一月 泉太 一 竹平八卷之文
 一 藤沢小市 一 竹平八卷之文
 一 竹平浦之文 一 竹平南之文
 一 藤沢宗吉

頭取之部

嵐 彦上 帛
 尾上 江連 義
 佛川 仲 高
 中山 宗 次 并
 浅尾 龜 子 義
 既之部
 中村 虎 又 帛
 嵐 雷 又 帛

惣後見

大権書

市川海老巻 著

雅も加も考人廿九号松

雅言化考之部

著文

本場 延 助
 宗河 政 玄 帛
 五嶋 隆 之 助
 五嶋 清 益 軒

播所

五嶋 龜 蝶
 五嶋 秀 助
 宗河 次 助
 五嶋 芝 義

千穰万葉系天ノ叶

至正書回市川國十布集

金

名了其くおがれをむと云ふこと

改元 市川國平流所中以其時方城原
 ひのきと大の心出所後数の人氣死
 成田名の八代目三井出と云ふ事
 取の白猿止を止動方冬と對面
 も致れ又六段なる猿止のいこふ
 あれば此國のり夏に乳や清法堂の
 池城下并見もいふ事云々
 又初孫^孫出ま七は孫孫止の
 言若くは孫孫止の止動と云ふこと
 市川國中屋有取の事云々
 且初日ともびおと云ふ事
 聖集のいふ方一統と云ふこと
 のこと初孫^孫出ま七は孫孫止の

大勢馬舟舟帳物より町と云ふこと
 かんざと云ふ事
 國十布総布川包八代目孫孫止
 ふらうと云ふこと
 所中一統大流及び三井出と云ふ事
 地止動のり大城表おとへ後地云
 近ひ事や孫孫日並云々
 ぬ一野に孫孫とて新網存存と云
 後孫孫と云ふこと
 中と云ふ事
 不夫以表出流と云ふ事
 孫孫の孫の事
 孫孫も云ふ事
 孫孫も云ふ事
 孫孫も云ふ事
 孫孫も云ふ事

さき二行目未習後事の形かとみな給
 度奥びよりおとみくへ向ひて成て
 申け多はとのまうく氣のなるあ場中一
 統受れり^場後係なるはあか
 さんあがり殺しあををいひうたげんか
 ち^罪あ^罪の係なる成ておのへふ
 猿獄猿と申さるうかたてあつて
 申うおあ^罪と^罪おもんがこふうか
 出^罪こむ^罪てあ^罪後受の^罪無
 場^罪後受^罪幅^罪幅の^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪

之外さのいとおうもあはれうあは
 かにて舞かると言ふ^場あ
 白猿はあはれうあはれうあは
 ちあ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪
 あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪あ^罪

生 巻一

足利に八外と云ふ所は保羅塔をいふ
うへ云々又下ふ移りては二役記
以松友の足年も勅をうかひて
入る所のや[見]切記も村談亦松
七役記うかひ及三役記をいふ
赤松は赤松の枝三務と云ふは侍
則ちちとまらぬのち[見]切記
之傳説初代紀の名をいふ云々
堂二中子移りては[見]切記
卷二終[見]切記大和行内之支國
友分史年終と云ふは[見]切記
井づり飛と助らるる[見]切記
八外に[見]切記[見]切記[見]切記
[見]切記[見]切記[見]切記[見]切記
物より出れぬ衣裝万端[見]切記

三三

園玉を中とせ若四連六のてり外
見物[見]切記三史小と云ふ所の
ぬらひをのせと云ふの移りては
有るがせり[見]切記後南枝史の
と秋史の終と云ふは[見]切記
ひらきあがり[見]切記侍場中一統
うへへいり[見]切記[見]切記
ものごと未のうの太へは[見]切記
拙く[見]切記切記[見]切記
湯より[見]切記[見]切記
幕六南堂[見]切記[見]切記
格を史[見]切記[見]切記
あて幕切[見]切記[見]切記
刀入[見]切記[見]切記
[見]切記[見]切記[見]切記

三十四

あふり文の跡念く **場所** 四種云々
又岩川役定年もお勤めは田舎の
大さの角力取入は入派の井 **善治** 吉成海
屋の腰札を飾り後九平を仕立てて
はまの初花は井器といふかみを付
つゝまごいふ下敷 **善治** 吉成海
関が腰 **善治** 吉成海
一して実取の要目 **善治** 吉成海
また有てあお中 **善治** 吉成海
の順場 **善治** 吉成海
身 **善治** 吉成海
場所 後 **善治** 吉成海
い **善治** 吉成海
ト **善治** 吉成海
後 **善治** 吉成海

ま **善治** 吉成海
げ **善治** 吉成海
外 **善治** 吉成海
後 **善治** 吉成海
さ **善治** 吉成海
力 **善治** 吉成海
役 **善治** 吉成海
仁 **善治** 吉成海
る **善治** 吉成海
さ **善治** 吉成海
の **善治** 吉成海
と **善治** 吉成海
出 **善治** 吉成海
今 **善治** 吉成海
有 **善治** 吉成海

三
五十六

高木森中沢坊後世をへふのり二間も
 ありとせり物ありとて送るをせり
 芝原末松と食ひてまけり花たて
 入るるをみりて成りて大勢
 つれの生逢候の松なりとて我のてい
 かりの雲いりて善きまのり候也
 枝はをがいにとせ候とてそのり
 ありとて候也候なりとて幕切を
 中多也
 門松は深草候所の松なりとて
 ぼん仕候所なりとて分りて
 史は深草とて他地へ史久松三人
 てまのり方用とて候なりとて
 梅并史がゆるとと難者うとて
 見たり候なりとて候なりとて

のり出動何役とて評判く候はせり
 まりといふはとて大坂表に候なり
 多りのり分りて候なりとて
 ありとて候なりとて出動ありて有常の
 事か候なりとて候なりとて
 ヤレユチ方豊福舎なりとて

▲五段客座

上上吉



圖三十節

張はれ候なりとて市川合候なり
 張候なりとて名前の候なりとて
 目入候なりとて候なりとて
 候なりとて候なりとて
 梅所候なりとて出動なりとて
 りとて候なりとて候なりとて
 肉て候なりとて候なりとて

中れりよひは遠くもあつたところの海に
 中たれと後たれもあつたところの海に
 ぬれ後まじりたるものもあつたところの海に
 道と交り紙の多物に細紙と交り
 仕置りもあつた金律の思付もあつた
 紙のあつたそれかたもあつた
 ぬれ後まじりたるものもあつた
 道と交り紙の多物に細紙と交り
 仕置りもあつた金律の思付もあつた
 紙のあつたそれかたもあつた
 ぬれ後まじりたるものもあつた
 道と交り紙の多物に細紙と交り
 仕置りもあつた金律の思付もあつた
 紙のあつたそれかたもあつた

美 園三史の秋あつたの金史あつた
 中たれと後たれもあつたところの海に
 ぬれ後まじりたるものもあつたところの海に
 道と交り紙の多物に細紙と交り
 仕置りもあつた金律の思付もあつた
 紙のあつたそれかたもあつた
 ぬれ後まじりたるものもあつた
 道と交り紙の多物に細紙と交り
 仕置りもあつた金律の思付もあつた
 紙のあつたそれかたもあつた

飛鳥のやうなる又もあはく[契]何れも
心算は出番奉りてはくを思ひあはく
勢りと空に旋念くを思ひあはく
或る三つの中かあるに思ひあはく
も海野村若うさるのあはく
多段[契]人甲といひあはく
九七言瀬のまき七言[契]飛
くけつ飛夫のまき七言[契]飛
海紫黙老女奉りあはく
まよふまよふ[契]二言
くも徳あはく
まよふまよふ[契]二言
まよふまよふ[契]二言
まよふまよふ[契]二言
まよふまよふ[契]二言

大なる二言
付あはく
真なる
是て
あはく
授振
物之
其
尾張
小
此
并
右

何と云ふか、いふに就方て少井
妻も此出物ありて由作の事、此子
中と云ふ人、中ておれおれ、
ヤコチ、尾張や、

▲五波之部

上吉 三井 涼 助 栞

賢は愛か尚、善は系、井の良
多をわかれ、設有七、出動七、井
善あはち方も、十年、築、清、善、院
善、我、出、動、善、善、
中、
外、
出来、社、
所、
ぬ、

七、少、井、
以、
里、
関、
助、
お、
五、
又、
中、
よ、
実、
の、
二、
後、
身、

ふふ亦流紫雲殿在於此市
大角之舟の短名ありては船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と
いふ船の短名をいふは船丸と

上上回 市川猿蓑

猿蓑は市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり

猿蓑は市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり
はては市川猿蓑の正装なり

其の面をたてあつて師進をたてて
其の指の按てよまをたて助のり
実のい若年をたてあつて
中より時節をたてあつて
合の困令のいふかきり
か保実をたてあつて
さくと評判をたてあつて
実のいふたをたてあつて
ゆんといふいふをたてあつて
猿狩の初年をたてあつて
いふいふをたてあつて
つらぬ猿狩をたてあつて
細子の猿狩をたてあつて
被毛の猿狩をたてあつて

いふて甲斐のいふたをたてあつて
中より猿狩をたてあつて
ゆんといふいふをたてあつて
猿狩の初年をたてあつて
いふいふをたてあつて
つらぬ猿狩をたてあつて
細子の猿狩をたてあつて
被毛の猿狩をたてあつて

猿狩の初年をたてあつて

三年も三年も名をよと疾てのるは
ういふもく下キは海り娘達を焼
のり極及多級六けひせぬさ
遊猿らう

上上 尾上新七

賢新七と云ふ弁金役名を抄
けおとまま揚下き左四怪徒
小半と云ふ七の三波五物以何屋
有と云ふは外核と云ふは
併ねたを其日敷もつと物出
せしと云ふ揚く初敷は
松並親負待と云ふ者り仲
うらと云ふは後者
又判書代と云ふは
小多女の侍と云ふは

其の係を抄の物語と云ふは
と云ふ令どか
あとのを
てその
もね
柳
よわ
成
の
あ
ま
ゆ
さ
ら

發 七折が長崎を以て出動被地を
傳之し傳有りて無固を以て出動
乞とも傳之て後亦之し病を更
以て伝たて成る九月大坂を以て出動
彼地を以て大なるを以て任令を
るて少弁を以て更に出動を傳
○は亦の是中の事也や上亦

切上主

浪尾徳三郎

發 浪尾が為河原を以て出動被地
大老又十年の改名ありて出動
以後我進之し出動いとも傳之て
お進考のむ方より升 珍 浪尾の全
律律刑記を以て後之て追て
のて後之ていおも 珍 浪尾のむ方
に亦より浪尾を以て出動を以て追

以て秋を以て出動被地
の想後考の密功より升れが海を
の律刑記も名古越のむ方より中
ぬと見物見のむ方より三折と名古
屋之てこの部の内之加弁律之れ大
の想後考の平七より升れ更之て
以て出動被地は後考被地を以て
け言ひ多きなりお進考後も付すは
當年の秋を以て出動被地を以て
出之て浪尾出動被地を以て出動
大坂乃浪尾出動被地を以て出動
海を以て律刑記を以て出動被地
け後考被地出動被地を以て出動
より升れ 珍 浪尾を以て出動被地
發 浪尾被地出動被地を以て出動

酒と酒の形とをさかむ後におまぐ
物切多秋の八幡と名はたてて後依
刺度不破殿のつれづれ之際更
より二筋去回並指の生勅被地をも
得り[三] 子ふ物とて喜はれ出動
手不花をさると後并 子秋とて

▲実悪欲殺道外之約

上 中山文公節

賢被愛溺座の乳方根據文とて并
[一] 其社と指之 [四] 志善と名はた
愛も希むるややハもあくとつて
知てあふ并二や長情誠志疎棄とて
ゆもふとて希と [五] 物お揃とてと
侍のいさ [六] 宗信亦存坊等
くは心替り志功能は方天徳とてと

か切望作と山はたせ月万端や
か七く [七] 保はるの所被縁とて
なぬとてとわとて 糸お持茶のさ
物と笑をれ并とて根室の登城と
侍と分久并ぬ [八] けふ是海邊の
直並我目生後朝のさよと侍と里七
月お揃と有ては名横機海松板松
つとれ行向やとて二やとて代後公 [九]
業はら其おとみ付系うとて身おと
おとてとてとて是用ひとてぬとて
さふおとてまが死縁とて候とてと
ぬぬの月とてとて是用ひとてぬと
寺とぬとてとて和泉とての場とて
各とてとてとてとてとてとてと
源平御編婦論平流とてとてと

書
上

「婦」との字が控ずるも後らが必ず
万康の父を室と置き置きては後者代淑を改
名して高野教也と名と三賢と稱し人云
お送は也并賢士に高野教也を主人
と稱し土府教也と稱し掛川源八
太と稱し源持良改名をうゝあふ
おま入の賢國三賢法之かみとありて
ふの文とふ小之松も後ト文之ち
かのおむ村をめおもふす_○後
源之抗_○又幕切近_○也_○元異幕
切のりある人_○合_○の_○也_○お_○あ_○は_○ら_○本
預介は_○あ_○ら_○方_○乃_○燒_○、_○直_○封_○出_○て_○紀_○物
といふ思ひ人の幕切も源良をぬめま
し_○と_○置_○た_○廣_○あ_○ら_○は_○お_○は_○存_○ある_○い_○ら_○も
傳く_○ゆ_○ら_○と_○と_○教_○が_○加_○る_○并_○ら_○と_○も_○喜_○ぶ

忠康軍統つる言といふやうなり外と
程と亦やと腹風なり

▲若女秋卷歌

極上書 **中山南枝** 稿

賢叔は西丸役者の名へん中山の
大者も後史で外_○是_○は_○方_○も_○一_○徳_○
り_○と_○以_○て_○南_○枝_○と_○名_○に_○り_○て_○お_○も_○さ_○し_○と_○い_○は_○れ_○り
そ_○後_○天_○保_○と_○年_○久_○と_○言_○は_○法_○書_○院_○書
序_○の_○出_○刻_○同_○七_○中_○年_○同_○本_○支_○花_○は_○出
刻_○の_○と_○も_○傳_○り_○と_○い_○は_○し_○と_○い_○は_○し_○が_○南_○枝_○歌
又_○支_○花_○の_○太_○太_○と_○い_○は_○れ_○の_○出_○刻_○の_○め_○を_○以
て_○イ_○キ_○と_○い_○は_○し_○年_○代_○花_○を_○り_○て_○あ_○ら_○の_○
書_○序_○の_○あ_○ら_○の_○め_○を_○以_○て_○あ_○ら_○の_○評
と_○い_○は_○し_○と_○い_○は_○し_○が_○南_○枝_○歌

るゆきまの青中ニ宗ておきす
 一ツト作のそおと保物後の谷て
 へ中くのあふは律とへじとてり
 升[契]八月替り候物律に候後
 中々まうまはく二やあふま水脈
 跡之谷はまを別と清もぬりり
 後より出如公のまを二一うかやも
 あけは南枝女中と別系[見物]ま
 見の里辰園三尖小よりまを考とる
 あふはのまのまを也[見物]後大
 りは有考と候と知候装足と区
 がりりおの候若中く生ぬもあま
 中々の妹背川をり[見物]切替り
 小かきぬ六南堂の物と一ちるあ
 第のの物[見物]本より候とあふあ

上もあう候ゆのうね織とぬそと
 一とみ付とらは内もあふもまはた今
 一と於於附のふ氣と候の物指とら
 一ととらをかきぬとらとらとら
 名々[見物]二やあま石筋辰[見物]表
 一は物とんにおき候のあ物と南枝
 一ト中と下候ゆのあふとて十位
 一のおとを八外外の候若氣とてと
 一はとあふ紙で人形とらとらとら
 一はして死とまきとらとらとら十八九の
 一とととと小は外が実と南枝女の
 一とんはとと候のあふとらとらと
 一あふとらとらとら[見物]第の物とら
 一との子替り候り方候とらとら[見物]本
 一あふとらとらとらとらとらとらとら

トミ花乃、送入らるるを抄得て娘の
 仕付一統をえんべりたりや多かり一巻
 之甲廓交奉を冬より衣箱の三流筆
 紙を弄りて常盤筆は清より熱連中
 出活う西京のつら舟とノ物南棗
 のお膏おつて残墨のいよあ敷の毎
 同紙未だぬか入か令くたまのおま拙く
 改改九月替う八陣、新新やうやうか
 お後得とあななく芳好松坊大
 むまひ流かたは京の糸紬で搦ひぬ
 むあふもよふななく暮切をゆかあ
 を埒の物も味ひ抱てあはれと切
 千両織と女房おと六才をゆうあをを
 何らう内南力は後村とんせて今身六
 びやう上りてあつとあふはむる方園取
 の女房と足お又保保妻付とて

とて江戸を渡すことの許りまよりま
 けがのあやうとのあをあをを
 老ては半後のあひ入言はサリた丁作
 りたま有てお箱同和具とあつた松と
 ぬひれおナト小細のやうぬひれ上
 まをそ答ぶあやめて何せむとあら
 ちぬ故同ドおあををナト流を仕と
 このよおとのサリ十人か十人を換ひ指
 てあつる小南枝出のあひぬ新ま
 でのお又保保妻付とて
 強てあを換てあつたはサリとあを
 強てあを園取村よあ強てあを
 あられおあを小細の南枝出のま
 若てあをおあをあをあをあ

かぶらむてむが付出の南カ合とて極
多と兼て令と相すといふ思ひ入をいろう
いふがあらむ極多と兼て兼との事
もあらむといふ物けしむるれば思ひか
るんば實は極多の者とのいひを
まての事若女形流の南枝とていふ事
もあらむといふ物けしむるれば思ひか
小町那の雲深衣極多とていふ事
かゝる物中にも別々相解入の極多
るんば衣極多の極多とていふ事
中にもいふ事入の極多の事とていふ事
判りたる事とて極多の事とていふ事
南枝とていふ事入の極多の事とていふ事
船の極多の極多の事とていふ事
一向なる事とて極多の事とていふ事

娘からいふ事とていふ事
かむ極多南枝とていふ事
それなり三洲屋極多の事とていふ事
彼地とも極多の事とていふ事
おありあて土屋極多の事とていふ事
おありあて物極多の事とていふ事
もつりまて極多の事とていふ事
お極多の事とていふ事
いふ事とていふ事
あられとていふ事
[美] 切深極多の事とていふ事
おそれとていふ事
候へば後事とていふ事
いふ事とていふ事
いふ事とていふ事

雲十部生平ありとの出合を三三の歌
 船又初平の初後と云ふべきまじりて
 足貫の意味あり申すの四巻ありて
 非七[既]切究穿祀おこりてあり
 七[外]の[既]今めあられたりか風
 あられたりよるに携同つれらるるに
 を若承のせうふも携同つれらるるも
 見えどわれは同い事の特丹むれあ上
 り(風情ありといふ事ありれ又ありま
 ぬ)も情念かほはらん川作はあて
 もわらともの(は)揺るをら外道に
 わらと難波のきまかお勅とる人物の
 目先と孫の七[外]おこりてあり
 限る非七[既]余り強きことありと
 文あるの由治るとは言はれどもはら

夕外このそと女の情と云ふが如しとて
 知るに[既]物と云ふ二両はあつて
 外に[既]行可後同ありわらるるの心と
 たり外に[既]場所を其三毛のそとと評
 判の[既]かろふ今も業は其のそと持
 く[既]右巻の中へは付目と女坂表に
 此のそと業は其のそと表にむらひのり
 おわりとあられそと今付は勅と考ねや
 くと評判ありおは合せて外[既]
 喜はるるにそと有ての心と[既]
 外に[既]マシキ 考ねや

○は外に若女歌見はるの目録不登外と
 ▲若女歌別願
 切上上吉 中村秋六 若
 [既]扱はるる後下巻のそとあり

中へもぬるを分ける人々 [五] 切堀田を掘り置き [六] 田舎に [七] 田舎に [八] 田舎に [九] 田舎に [一〇] 田舎に [一一] 田舎に [一二] 田舎に [一三] 田舎に [一四] 田舎に [一五] 田舎に [一六] 田舎に [一七] 田舎に [一八] 田舎に [一九] 田舎に [二〇] 田舎に [二一] 田舎に [二二] 田舎に [二三] 田舎に [二四] 田舎に [二五] 田舎に [二六] 田舎に [二七] 田舎に [二八] 田舎に [二九] 田舎に [三〇] 田舎に [三一] 田舎に [三二] 田舎に [三三] 田舎に [三四] 田舎に [三五] 田舎に [三六] 田舎に [三七] 田舎に [三八] 田舎に [三九] 田舎に [四〇] 田舎に [四一] 田舎に [四二] 田舎に [四三] 田舎に [四四] 田舎に [四五] 田舎に [四六] 田舎に [四七] 田舎に [四八] 田舎に [四九] 田舎に [五〇] 田舎に [五一] 田舎に [五二] 田舎に [五三] 田舎に [五四] 田舎に [五五] 田舎に [五六] 田舎に [五七] 田舎に [五八] 田舎に [五九] 田舎に [六〇] 田舎に [六一] 田舎に [六二] 田舎に [六三] 田舎に [六四] 田舎に [六五] 田舎に [六六] 田舎に [六七] 田舎に [六八] 田舎に [六九] 田舎に [七〇] 田舎に [七一] 田舎に [七二] 田舎に [七三] 田舎に [七四] 田舎に [七五] 田舎に [七六] 田舎に [七七] 田舎に [七八] 田舎に [七九] 田舎に [八〇] 田舎に [八一] 田舎に [八二] 田舎に [八三] 田舎に [八四] 田舎に [八五] 田舎に [八六] 田舎に [八七] 田舎に [八八] 田舎に [八九] 田舎に [九〇] 田舎に [九一] 田舎に [九二] 田舎に [九三] 田舎に [九四] 田舎に [九五] 田舎に [九六] 田舎に [九七] 田舎に [九八] 田舎に [九九] 田舎に [一〇〇] 田舎に

のりやまを金とて挿入押入を [一] 挿入押入 [二] 挿入押入 [三] 挿入押入 [四] 挿入押入 [五] 挿入押入 [六] 挿入押入 [七] 挿入押入 [八] 挿入押入 [九] 挿入押入 [一〇] 挿入押入 [一一] 挿入押入 [一二] 挿入押入 [一三] 挿入押入 [一四] 挿入押入 [一五] 挿入押入 [一六] 挿入押入 [一七] 挿入押入 [一八] 挿入押入 [一九] 挿入押入 [二〇] 挿入押入 [二一] 挿入押入 [二二] 挿入押入 [二三] 挿入押入 [二四] 挿入押入 [二五] 挿入押入 [二六] 挿入押入 [二七] 挿入押入 [二八] 挿入押入 [二九] 挿入押入 [三〇] 挿入押入 [三一] 挿入押入 [三二] 挿入押入 [三三] 挿入押入 [三四] 挿入押入 [三五] 挿入押入 [三六] 挿入押入 [三七] 挿入押入 [三八] 挿入押入 [三九] 挿入押入 [四〇] 挿入押入 [四一] 挿入押入 [四二] 挿入押入 [四三] 挿入押入 [四四] 挿入押入 [四五] 挿入押入 [四六] 挿入押入 [四七] 挿入押入 [四八] 挿入押入 [四九] 挿入押入 [五〇] 挿入押入 [五一] 挿入押入 [五二] 挿入押入 [五三] 挿入押入 [五四] 挿入押入 [五五] 挿入押入 [五六] 挿入押入 [五七] 挿入押入 [五八] 挿入押入 [五九] 挿入押入 [六〇] 挿入押入 [六一] 挿入押入 [六二] 挿入押入 [六三] 挿入押入 [六四] 挿入押入 [六五] 挿入押入 [六六] 挿入押入 [六七] 挿入押入 [六八] 挿入押入 [六九] 挿入押入 [七〇] 挿入押入 [七一] 挿入押入 [七二] 挿入押入 [七三] 挿入押入 [七四] 挿入押入 [七五] 挿入押入 [七六] 挿入押入 [七七] 挿入押入 [七八] 挿入押入 [七九] 挿入押入 [八〇] 挿入押入 [八一] 挿入押入 [八二] 挿入押入 [八三] 挿入押入 [八四] 挿入押入 [八五] 挿入押入 [八六] 挿入押入 [八七] 挿入押入 [八八] 挿入押入 [八九] 挿入押入 [九〇] 挿入押入 [九一] 挿入押入 [九二] 挿入押入 [九三] 挿入押入 [九四] 挿入押入 [九五] 挿入押入 [九六] 挿入押入 [九七] 挿入押入 [九八] 挿入押入 [九九] 挿入押入 [一〇〇] 挿入押入

ともてはれんす。小細言并に皆後文細
 正場ありとはれんす。又持て実々社会
 の義で并ある時後若何に批判しや
 り。又持てはれんす。小細言並に并
 後文ありと申す。又そのとを突くはれん
 すと。司馬の事柄は。いかに持てや。あ
 と。又その事柄は。いかに持てや。あ
 実のいとも。いかに持てや。あ
 月。いかに持てや。あ
 中。并に。いかに持てや。あ
 ね。いかに持てや。あ
 向。いかに持てや。あ
 て。并に。いかに持てや。あ
 落。て。持て。いかに持てや。あ
 あり。いかに持てや。あ

中。いかに持てや。あ
 く。切。いかに持てや。あ
 後。并に。いかに持てや。あ
 の。いかに持てや。あ
 又。いかに持てや。あ
 い。いかに持てや。あ
 の。いかに持てや。あ
 別。いかに持てや。あ
 中。いかに持てや。あ
 の。いかに持てや。あ
 系。いかに持てや。あ
 の。いかに持てや。あ
 十。いかに持てや。あ

入部どりの内久々く **巴** 後接

の首筋繩後から出れる所の尻より
引れ繩をもちお返し申すは引け
其の切落後より股を股に引分け

巴 二向者より申すはもれを引替は
お返し申すは引替は

引替は **巴** 後上向は筋馬幅は
もれを引く

なまを引くは引くは引替は引
は引替は引替は

は引替は引替は **巴** 二級加古川
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

分は目下下や手印は切落後

巴 引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

引替は引替は **巴** 引替は引替は
引替は引替は

三

三

多美のりつてをくし出動と結末
く 経天 史名を記すも海に流す
市川成る等通すともあはれはたのび
枝の勢もあはれ易く出多をく

尾符
都菴可様

補浪花
長々舎都様

後世にこれ附る名をたの巻に改

巻三度物後者目録

猿齋前留 中打勘三巻

同 二留 市打利三巻

同 三留 河原所権前

△凡そ花づくしよりなるものぞ

▲立役巻頭

至五書 嵐鴉寛

ひくてもたきしれいどきれ危

▲立役巻袖

至五書 内岡我登

ともよの巻よりなるもの危

▲立役三巻

至五書 嵐吉三巻

味の所乃ちりし和字入の危

至五書 南川小園派

小まのよゝと活ひよこの花

上上吉

中村福助
市川高藤

松見ゆりかき花乃りてらる

上上吉

市川猿蓑
松葉白雲

きんこ〜とあがき花鳥の花

上上吉

中村芝翫

〜のよゝむ〜切花は花

上上吉

嵐和之丞

たま〜花ぶふ出せ乃り花

▲立役後見

大上吉

松葉白雲

ぶら〜てもおひさの花

▲惣巻袖

上上吉

森田勘弥

ゆ役でもふのよゝは花

▲実西敵役之部

上上吉

大谷友右衛門

二重目と〜ぬ実西の花

上上吉

中村仲介

おひさ〜の〜新糸の花

上上吉

浅尾奥山

親の代り〜この花

上上吉

中村竹花

款ゆ〜の〜糸花の花

上上吉

中山市蔵

みゆの〜の〜敵役乃り花

関哥介

上上

中村徳兵衛

中村松太郎

おひとあ、いおひとあ

▲若井松太郎

尾上梅香

あもあもあ、地蔵松太郎

▲若井松太郎

坂東松太郎

これもあもあ、あもあ

▲若井松太郎

尾上梅香

これもあもあ、あもあ

▲若井松太郎

岩井松太郎

あもあ、あもあ

上上吉

市川松太郎

あもあ、あもあ

上上吉

若井松太郎

あもあ、あもあ

上上吉

嵐小六

中村松太郎

あもあ、あもあ

▲若井松太郎

市川松太郎

坂井松太郎

尾上梅香

市川松太郎

関東松太郎

市川松太郎

あもあ、あもあ

市川松太郎

大谷松太郎

上上吉

上上

樂額

▲惣後見

中村富盛

みまのりまのり此のり

▲願取之部

後藤清盛

後藤清盛

三條勘次

中村泰盛

▲狂言此者之部

後藤清盛

後藤清盛

後藤清盛

後藤清盛

後藤清盛

千重萬方家之門



安政二乙卯年正月

大坂書林

河内屋平七

京都書林

吉野屋勘兵衛

名古屋書林

金銅屋朱藏

